

教育開発支援機構

教育開発・学習支援センター

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】(参考)

教育開発・学習支援センターでは、2020年度よりFD推進センターおよび学習環境支援センターの統合によって発足したこともあり、安定的な運営の確立のために中長期の運営方針の検討を行い、また両センターから引き継いだ継続事業の点検のほか、これから新たに取り組むべき課題を洗い出し、全学的な教育開発・学習支援活動に取り組まれることを期待したい。特に、教育・学習支援をより効果的に機能させるためにも「学生による授業改善アンケート」の実施方法やそのフィードバックの方法についてもさらに検討され、教員の教育の質や学生の学びの質を向上させる仕組みの検討を引き続き期待したい。

なお、新型コロナウイルス感染症を防止しながらの教育活動は全学的な課題であるが、オンライン授業における問題点の洗い出しや学生個々のケア、さらに対面型授業における問題点等を含めて、教育開発支援機構および3センターで力を合わせ、解決に取り組まれることを期待したい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

FD推進センターおよび学習環境支援センターからの引き継いだ76事業を、設定した4つの大項目のそれぞれに5つの中項目で70事業に整理した「LFセンター体制における引継ぎ業務の位置付け」を作成した。2020年度のコロナ禍による非常時から変貌した社会情勢を鑑み、このリストに基づくSTP分析から「2021年度LFセンター業務案」をユニット・リーダー会議で共有している。当面は、withコロナ対応への支援を優先しているが、中期的な対面とオンラインの教育学習環境が共利共生するための、新たな全学的課題として学内デジタルトランスフォーメーションの強化に着目している。2021年度は、副学長プロジェクトであるDXイニシアティブプロジェクトとの連携を予定している。他方、2017年度から実施する現行「学生による授業改善アンケート」は、2021年度は全面的に点検する4年目に当たる。2020年度にリニューアルしたアンケートシステムの活用、授業レベル・カリキュラムレベル・全学レベルと異なるレベルへのフィードバックなどを考慮した点検を行う予定である。これらを総合して、教育と学習の質向上を支援する活動を目指したい。

学生対象のオンライン授業に関するアンケートから、Good Practice的なポイントは「明確な目標をもつ授業設計」の上、「双方向性の授業運営」を「ICTツールの利活用」で実施することが広く共通しており、それぞれの支援を教員対象に実施予定である。また、オンラインのみの制限された学習環境では、学生の孤独化が顕在することから、オンラインでつながる個別相談窓口を、ピアネットなどの学生スタッフを活用し取り組む予定である。一方、今後対面とオンラインが共存するハイブリッド型やハイフレックス型授業が広く実施されれば、2020年度の経験とは異なる新たな課題が生じる可能性は高い。センターが参加する「withコロナ時代の教育を考えるワーキング」などと連携しながら、教育開発支援機構企画委員会で適宜問題意識を共有しながら、適切な課題を解決を模索したい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

教育開発・学習支援センターでは、FD推進センターおよび学習環境支援センターからの引き継いだ76事業を、設定した4つの大項目のそれぞれに5つの中項目で70事業に整理した「LFセンター体制における引継ぎ業務の位置付け」を作成したことは評価できる。2017年度から実施している現行の「学生による授業改善アンケート」は、2021年度は全面的に点検する5年目に当たる。2020年度にリニューアルしたアンケートシステムの活用、授業レベル・カリキュラムレベル・全学レベルと異なるレベルへのフィードバックなどを考慮した点検を行う予定が示されている。教員の教育の質や学生の学びの質を向上させる基本的な仕組みとして実効性のあるその取り組みに引き続き期待したい。対面とオンラインが共存するハイブリッド型やハイフレックス型授業において生ずる新たな課題に関しては、教育開発支援機構企画委員会で適宜問題意識を共有しながら、解決を探る方向性が示されている。その取り組みに期待したい。

II 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①教員の資質の維持・向上に取り組んでいますか。

S A B

※教員の資質の維持・向上のためにどのような取り組みが行われているか概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

教育および学びの質の向上を目指し、(1) 全学的な教育支援施策の企画と(2) FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援を通じた教員の質の維持・向上の現状を以下に示した。

(1) 全学的な教育支援施策の企画

2020年度、教育開発支援機構内のFD推進センターと学習環境支援センターを統合させ新設された教育開発・学習支援センターでは、以下の3点に取り組み、作成した「LFセンター体制における引継ぎ業務の位置付け」を確認し、それに基づき年度末に「2021年度LFセンター業務案」を共有している。また、学習環境改善検討委員会を立ち上げ、キャンパスを横断する全学組織体との連携を図っている。

- (1-1) 教育開発・学習支援センターの中長期運営方針の検討
- (1-2) 教育開発・学習支援センターが手がけるFD継続業務の点検
- (1-3) 教育開発・学習支援センターと学内関連組織との連携

(2) FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援

2020年度目標として設定した以下の8課題すべてを概ね達成した。これらの成果を<全般にかかわる活動>、<教育支援にかかわる活動>、<学習支援にかかわる活動>として現状を概観する。

- (2-1) 授業改善アンケートの新システム導入とその運用
- (2-2) オンライン授業におけるマイクロ・マクロレベルでのフィードバック
- (2-3) 授業改善アンケートと他アンケートとの連携の検討
- (2-4) ミドル・レベル(学部・学科単位)でのFD活動支援の拡大
- (2-5) 新GPA制度導入に伴う成績評価のあり方に関する指針策定の検討
- (2-6) 正課外学習の充実
- (2-7) 広報方針に沿った活動強化
- (2-8) 学生の主体的な正課学習への支援

<全般にかかわる活動>

コロナ禍により強いられたいオンライン学習の環境整備に向け、学習支援システムのシステム増強およびメンテナンス強化を行った。本学で提供する各種ツールの、ファーストガイドを作成、公表し、オンラインを活用した授業実施の支援を行った。また、授業支援アシスタントおよびラーニングサポーターの採用枠を大幅に増やし、教員が実施するオンライン授業を支援することで学習環境の整備を図った。SD支援としてFDワークショップを開催し、LFセンター広報方針に基づきオンラインを活用した広報活動を強化した。これらの事業は2021年度に引き継がれる。

<教育支援にかかわる活動>

新システム(FDマネージャー)による授業改善アンケートを実施し、授業担当者がWeb上で全学集計結果を確認することを可能とした。オンライン授業に関する教員向けセミナーとして、FDセミナーおよびHOSEI2020オンライン授業支援特設チームとの協働セミナーを実施した。また、FD教員研修を2学部で実施した。さらに、GPCA集計結果を、各授業担当者がWeb上で随時確認することを可能とし、全学集計結果を公開した。これらの事業は2021年度に引き継がれる。

<学習支援にかかわる活動>

学生対象のオンライン授業に関するアンケートを行い、受講環境状況、よりよいオンライン授業を実施するための方策、オンライン授業におけるメリットとデメリット等をまとめ、学内外に公表した。例年通り「学習支援ハンドブック」の改訂を行った。また、ピアネット運営委員会による全学的正課外学習支援を行い、ピアネットの学生スタッフ活動のオンライン環境実施を支援した。さらに、Lステゼミに8回の講座を提供した。ピアネット合同企画として「新2年生サポートDays」も実施した。これらの事業は、ピアネット運営委員会と学習ステーション運営委員会、それらを管轄する学習サポートユニットに引き継がれている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入

センター内の3ユニット「教育サポートユニット」「学習サポートユニット」「データ活用推進ユニット」の活動は、定期的なリーダー会議で実効性がある全学的な支援活動の提案・企画・実施・検証する運用体制が構築されている。また、センターの年度活動方針および年度活動報告などは、教育開発支援機構企画委員会および学部長会議と研究科長会議で点検されている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入

- ・「LFセンター体制における引継ぎ業務の位置付け」(2020年11月作成)

- ・「2021年度 LF センター業務案」(2021年3月作成)
- ・2020年度 学習環境改善検討委員会議事
- ・2020年度 教育開発・学習支援センター活動報告
- ・2020年度 教育開発・学習支援センター ユニット・リーダー会議議事録
- ・2020年度 学習ステーション運営委員会議事録
- ・2020年度 ピアネット運営委員会議事録
- ・2020年度 学習支援システム運営委員会議事録

②教員の資質の向上に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入

COVID-19 への対応・対策として、三密を避ける施策を 2020 年度に導入した。主に、(1) LF センター運営のオンライン化と (2) FD 活動の推進・支援のオンライン化である。

(1) LF センター運営のオンライン化

- ビジネスチャット Slack による情報伝達・共有
- オンライン会議システム Zoom による会議
- 会議資料の電子化と学内 desknets での共有
- リーダーへ LF センター活動専用タブレット貸与

(2) FD 活動の推進・支援のオンライン化

- 授業改善アンケート集計のオンライン配信 (2020 年度 FD マネージャー導入)
- GPCA 集計結果のオンライン配信 (2020 年度導入)
- FD 教員セミナー、FD ワークショップのオンライン化導入
- FD 研修のオンライン対応
- アカデミックサポートの Zoom 対応
- L ステゼミなど学習ステーション企画のオンライン化導入
- 学習支援ハンドブックのオンデマンドコンテンツ化

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入

- ・「2021 年度「学生による授業改善アンケート」の実施について」(2020 年度第 10 回教育開発・学習支援センターユニット・リーダー会議)
- ・「2021 年度第 3 回 FD 教員セミナーの実施報告について」(2020 年度第 18 回学部長会議)
- ・「2020 年度教育サポートユニット活動報告」(2020 年度第 10 回教育開発・学習支援センターユニット・リーダー会議)
- ・「2021 年度アカデミック・サポートサービスについて」(2020 年度第 20 回学部長会議)
- ・「2020 年度学習サポートユニット活動報告」(2020 年度第 10 回教育開発・学習支援センターユニット・リーダー会議)

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
(1) センターの活動について、教育開発支援機構企画委員会にて報告・チェックの機会を有し、さらに学部長会議と研究科長でも報告する機会が与えられていることから重層的にチェックを受けることができる。	
(2) 各ユニットには、リーダーに加え、サブリーダーが設定され、多様で高い機動的な運営を可能としている。	
(3) ユニットメンバーは、各学部から頂いた推薦者を、リーダー会議で適材適所に配置している。各学部などの現場での意見を取り入れやすい環境を整えている。	

(3) 問題点・課題

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
2021年度は対面授業を基本とする授業運営の原則が表明されている。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の懸念も払拭できない社会情勢から、オンライン授業を積極的に活用するハイブリッド型もしくはハイフレックス型の授業運営への支援が必要である。すでに、2021年度以降のLMS運営については、その主体を鑑み、教育サポートユニットの管轄で行う予定である。加えて、教学統括副学長のもとに2020年度のオンライン授業を支援する目的で設置されたHOSEI2020オンライン授業支援特設チームの活動の引き継ぎ、DXイニシアティブプロジェクトとの連携、オンラインにより発展する授業運営への支援と検証を、2021年度以降の重点課題として検討を進める予定である。	

【この基準の大学評価】

教育開発・学習支援センターは、教育開発支援機構内のFD推進センターと学習環境支援センターの統合によって発足して直ちに「中長期運営方針の検討」「FD継続業務の点検」「学内関連組織との連携」の3点に取り組んだことは評価できる。また、「FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援」に関し、2020年度目標として設定した8課題すべてについて概ね達成した点も評価できる。新型コロナウイルス感染症禍により強いられたオンライン学習の環境整備に向け、学習支援システムのシステム増強およびメンテナンス強化を行い、本学で提供する各種ツールの、ファーストガイドを作成、公表し、オンラインを活用した授業実施の支援を行った。その結果として、学習支援システムに対する教員の理解が深まり、使い勝手のよさを新たに多くの教員が認識したことは高く評価できる。学生対象のオンライン授業に関するアンケートを行い、受講環境状況、よりよいオンライン授業を実施するための方策、オンライン授業におけるメリットとデメリット等をまとめ、学内外に公表したことも評価できる。COVID-19への対応・対策として、「LFセンター運営のオンライン化」および「FD活動の推進・支援のオンライン化」といった三密を避ける施策を導入した点も評価できる。

2 教育研究等環境

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。	
①学生の主体的な学習を支援するための取り組みを行っていますか。	S A B
<p>【学生の主体的な学習を支援するための取り組み】 ※箇条書きで記入。</p> <p>正課外学習を支援する以下の2つの活動を実施している。</p> <p>(1) 学習ステーション運営委員会において、学生・教員・職員の協働による学生の自主的・主体的な学習活動のサポートを行っている。</p> <p>(2) ピアネット運営委員会において、ピアネット学生スタッフ研修会を実施、各団体の相互連携を強化している。また、合同構成各団体の学生に対して活動の事前・事後にピアネット・コンピテンシーテストを実施することを依頼し、概ね順調に調査結果を収集している。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>センター内の「学習サポートユニット」が、「学習環境改善検討委員会」「学習ステーション運営委員会」「ピアネット運営委員会」を管轄している。サブリーダーがそれらの委員会の提案・企画・実施・検証する運用を基本に、リーダーがユニット内でこれらの活動を取りまとめている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法政大学ピアネット規程 ・2020年度学習ステーション運営委員会議事録 ・2020年度ピアネット運営委員会議事 	
<p>②学生の学習環境の整備・支援に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。</p>	
<p>※取り組みの概要を記入</p> <p>COVID-19への対応・対策として、三密を避ける正課外プログラムを企画・実施した。主なものを以下に示す。</p> <p>a. 学習ステーション活動のオンライン化</p> <p>b. オンライン「Lステゼミ」の実施</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- c. ピアネット合同研究会など協同プログラムのオンライン化の検討
- d. 新入生サポートのオンライン実施
- e. 「新2年生サポート Days」の実施

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入

・「2020年度学習サポートユニット活動報告」（2020年度第10回教育開発・学習支援センターユニット・リーダー会議）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
(1) 正課・正課外の学生の主体的な学習を「学習サポートユニット」でトータルに掌握し、効果的な施策を提案・企画・実施・検証の実現が可能である。	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
これまで学習ステーションを含むピアネットでは、正課外の学生の支援を行ってきた。今年度の取り組みから正課学習と融合した支援が加わった。そのため、中長期的な視点を踏まえ、ピアネットで展開する正課外学習の学修効果をピアネットコンピテンシーなどで検証しながら、リーダー会議でセンター全体の運営などについて検討する。また、対面で教育研究活動にオンラインでの取り組みが加わることで、キャンパス利用が大きく変貌する可能性がある。これらの問題点や課題を学習環境改善検討委員会で共有し、必要に応じて改善策を検討する予定である。	

【この基準の大学評価】

教育開発・学習支援センターでは、学生の主体的な学習を支援する取り組みとして、学習ステーション運営委員会において、学生・教員・職員の協働による学生の自主的・主体的な学習活動のサポートを行っていること、また、ピアネット運営委員会において、ピアネット学生スタッフ研修会を実施し、各団体の相互連携を強化していることは評価できる。COVID-19への対応・対策として、「学習ステーション活動のオンライン化」「オンライン『Lステゼミ』の実施」「新入生サポートのオンライン実施」といった三密を避ける正課外プログラムを企画・実施した点は評価できる。なお、従来の学習ステーションを含むピアネットでは正課外の学生の支援を行ってきたが、今年度の取り組みから正課学習と融合した支援が加わるという。今後の展開に期待したい。

III 2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教員・教員組織
1	中期目標	あらゆる立場の人びとへの共感に基づく健全な批判精神をもち、社会の課題解決につながる「実践知」を創出しつづけることを謳った法政大学憲章を実現すべく、教育および学びの質の向上に向けた全学的な教育支援施策の企画、FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援を行う。(FD推進センター)
	年度目標	(1) 全学的な教育支援施策の企画 (1-1) 教育開発・学習支援センターの中長期運営方針の検討 (1-2) 教育開発・学習支援センターが手がけるFD継続業務の点検 (1-3) 教育開発・学習支援センターと学内関連組織との連携 (2) FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援 (2-1) 授業改善アンケートの新システム導入とその運用 (2-2) オンライン授業におけるマイクロ・マクロレベルでのフィードバック (2-3) 授業改善アンケートと他アンケートとの連携の検討 (2-4) ミドル・レベル(学部・学科単位)でのFD活動支援の拡大

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		(2-5)新 GPA 制度導入に伴う成績評価のあり方に関する指針策定の検討 (2-6)正課外学習の充実 (2-7)広報方針に沿った活動強化 (2-8)学生の主体的な正課学習への支援
	達成指標	年度目標の達成率にて評価する。 S : 80%以上 A : 70-79% B : 60-69% C : 60%未満
年度末 報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	11 項目の年度目標を達成し「S」とした。 (1-1)センターの中長期運営方針を検討した。 (1-2)引き継ぎ業務を整理し事業の継続等を点検した。 (1-3)当初予定していた学習環境改善検討委員会の役割を再検討の必要が生じたが、今年度立ち上げができた。 (2-1)秋学期には新システム (FD マネージャー) によるアンケート実施およびその運用を行った。 (2-2)新システムにより、各授業担当者が Web 上で随時集計結果の確認を可能とした。学生対象のオンライン授業アンケートを行い、受講環境、よりよいオンライン授業、オンライン授業におけるメリットとデメリットをまとめ、学内外に公表した。オンライン授業に関する教員向け FD セミナーを開催した。また、HOSEI2020 オンライン授業支援特設チームと協働するセミナーを実施した。 (2-3)非常時対応の春学期学生対象オンライン授業アンケートの企画、実施、集計、分析を、大学評価室と協働した。 (2-4)FD 教員研修を企画し、3 学部で実施した。 (2-5)GPA 集計結果を、各授業担当者が Web 上で随時確認することを可能とした。新制度におけるオンライン授業の実施の影響について全学集計結果を学部長会議にて報告した。 (2-6)ピアネット運営委員会による全学的正課外学習支援を行った。また、ピアネットの学生スタッフによる各ユニット活動の運営に、オンライン環境に適応できるように支援した。 (2-7)FD 推進センターより引き継いだ方針を「LF センター広報方針」に改訂した。オンラインを活用した広報活動を強化した。 (2-8)「学習支援ハンドブック」の改訂を行った。また、そのコンテンツを Web 上で配信した。L ステゼミに 5 回の講座を提供した。また、学習ステーションの学生スタッフ企画をオンライン環境での学びや学生生活支援として運営した。
	改善策	—
No	評価基準	教育研究等環境
2	中期目標	教育および学びの質の向上を促進するため、教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援に向けた全学的な施策の企画・提案・調整を行う。(LEC) ①市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を検討の上、改善策や対応策を講ずる。 ② HOSEI2030 アクション・プラン (教学推進 4 アクティブラーニング・実践知育成の学び) に基づき、大人数授業における学生の授業サポーター (ないし学習サポーター) 制度の設置に向けて検討を開始する。 ③第一期中期経営計画に基づき、ピアネット合同企画の実施等、さらなるユニット間の連携強化に取り組む。 ④第一期中期経営計画に基づき、ピアネット・コンピテンシーおよびバリュールーブリックについて検証を開始する。
	年度目標	(1)教育開発・学習支援センターが手がける教育・学習環境支援継続業務の点検 (2)市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を把握し、対応策を検討

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		(3) 授業アシスタント制度（授業支援アシスタント、ラーニングサポーター）の安定的な運用 (4) 合同研修会、ピアネット所属ユニットの協同プログラムを実施 (5) ピアネット・コンピテンシーおよびバリエールブックについて検証
	達成指標	年度目標の達成率にて評価する。 S：80%以上 A：70-79% B：60-69% C：60%未満
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	全5項目の年度目標の3項目は達成したものの、2項目はコロナ禍の非常時のために十分に達成できなかったため、「A」とした。ただし、この自己評価は、昨年度より準備していた目標項目を実施できない非常時の社会的および経済的な制約が原因であり、止むを得ないものである。 (1) 引き継ぎ業務を整理し事業の継続等を点検した。 (2) 今年度は市ヶ谷キャンパス工事完了年次による影響は限定的であったため、コロナ禍により強いられたオンライン学習環境に対し、学習支援システムのシステム増強およびメンテナンス強化を行った。それらの利用を周知するためのファーストガイドを作成、公表し、学習環境の支援を行った。 (3) コロナ禍により急遽オンライン授業の活用が進んだこともあり、授業支援アシスタントおよびラーニングサポーターの採用枠を大幅に増やし、教員が実施するオンライン授業を支援することで学習環境の整備を図り、安定的な運用を継続した。 (4) コロナ禍の社会的経済的制限により多くの実施を見合わせたが、「新2年生向け企画」を合同で実施した。 (5) ピアネットを構成する各団体において、活動の事前・事後にピアネット・コンピテンシーテストを実施したものの、今年度は十分な調査数を収集するには至らなかった。
改善策	(5) オンラインを中心とした活動においても学生の成長の成果が十分にうかがえるため、引き続きコンピテンシーテストと併せて他のテストも組み合わせた実施について検討を進めたい。	
<p>【重点目標】 教員・教員組織の年度目標(1)と教育研究等環境の年度目標(1)をリーダー会議内で検討することを重点目標とした。今年度より発足した当センターの安定的な運営を確立するためにも、改組で引き継いだ事業や活動について整理し、その点検から次期(2022年度より)中期目標の設定に向けて準備する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 教員・教員組織の年度目標(1)に対する施策は、(1-1)「業務内容の申し合わせ策定」と「2022年度以降の中長期目標の検討」、(1-2)「学習支援システム」の導入と「これまでのFDとLEC業務の経年リストの作成」、(1-3)「学習環境支援調整委員会(仮称)の立ち上げ」と「学習環境改善検討委員会の運営」を行う。また、教育研究等環境の年度目標(1)に対する施策は、「学習環境支援調整委員会(仮称)の立ち上げ」と「学習環境改善検討委員会の運営」と「これまでのFDとLEC業務の経年リストの作成」を行う。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 今年度は、教育開発・学習支援センター設置初年度であり、引き継ぐ事業や活動を整理し、安定した運営体制の構築を重点目標としたセンター年度計画を企画していた。しかし、4月の緊急事態宣言による社会活動制限から急遽オンライン形式が教育・学習環境の主体となったため、センターでは主に正課学習を支援する緊急対応を展開しながら、当初計画に取り組んだ。その結果、正課学習に対する緊急措置を施しながら、FDおよび学習環境整備に関する計画は概ね達成できた。しかし、ピアネットを中心とする正課外学習における全学ネットワークの構築やその評価システムの検証については、コロナ禍の制限から、根本的な見直しが必要となり、十分には達成できなかった。他方、重点目標に掲げた「業務内容の申し合わせ策定」「2022年度以降の中長期目標の検討」「『学習支援システム』の導入」「これまでのFDとLEC業務の経年リストの作成」を達成した。再検討が必要な「学習環境支援調整委員会(仮称)の立ち上げ」「学習環境改善検討委員会の運営」を課題とし、新しい社会におけるセンターの次期(2022年度より)中期目標設定に向けて準備を整えた。</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

教育開発・学習支援センターでは、「教員・教員組織」に関する 2020 年度の目標である「全学的な教育支援施策の企画」3 項目、および「FD 活動の推進および各教学組織における FD 活動の支援」8 項目の計 11 項目について年度目標を達成したことは評価できる。一方、「教育研究等環境」に関する 2020 年度の目標については全 5 項目のうちの 3 項目は達成したものの、2 項目は新型コロナ感染症禍のため十分には達成できなかった。この 2 項目に関しては、予想の出来なかった新型コロナ感染症禍に原因があり、止むを得ない結果ではあるが、緊急事態宣言により急遽オンライン形式が教育・学習環境の主体となり、学習支援システムの増強およびメンテナンス強化を行い、それらを利用周知するためのファーストガイドを作成・公表し、教員・学生支援に努めたことは高く評価できる。

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教員・教員組織
1	中期目標	あらゆる立場の人びとへの共感に基づく健全な批判精神をもち、社会の課題解決につながる「実践知」を創出しつづけることを謳った法政大学憲章を実現すべく、教育および学びの質の向上に向けた全学的な教育支援施策の企画、FD 活動の推進および各教学組織における FD 活動の支援を行う。(FD 推進センター)
	年度目標	(1) 全学的な教育支援施策の企画 (1-1) 教育開発・学習支援センターの中長期運営方針の策定 (1-2) DX イニシアティブプロジェクトとの連携 (1-3) センター活動の学内 PR 強化 (2) FD 活動の推進および各教学組織における FD 活動の支援 (2-1) 授業改善アンケートの点検と活用検討 (2-2) オンライン授業に関する情報共有の施策検討 (2-3) 授業改善アンケートと他アンケートとの連携の検討 (2-4) ミドル・レベル(学部・学科単位)での FD 活動支援の拡大 (2-5) 新 GPA 制度の活用に関する指針策定の検討 (2-6) 正課外学習の充実 (2-7) 学生の主体的な正課学習への支援
	達成指標	年度目標の達成率にて評価する。 S : 80%以上 A : 70-79% B : 60-69% C : 60%未満
No	評価基準	教育研究等環境
2	中期目標	教育および学びの質の向上を促進するため、教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援に向けた全学的な施策の企画・提案・調整を行う。(LEC) ①市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を検討の上、改善策や対応策を講ずる。 ② HOSEI2030 アクション・プラン(教学推進 4 アクティブラーニング・実践知育成の学び)に基づき、大人教授業における学生の授業サポーター(ないし学習サポーター)制度の設置に向けて検討を開始する。 ③第一期中期経営計画に基づき、ピアネット合同企画の実施等、さらなるユニット間の連携強化に取り組む。 ④第一期中期経営計画に基づき、ピアネット・コンピテンシーおよびバリュールーブリックについて検証を開始する。
	年度目標	(1) 対面・オンライン授業が共存する学習環境の整備について学習環境改善検討委員会で検討 (2) 授業アシスタント制度(授業支援アシスタント、ラーニングサポーター)の効果的な運用

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

	(3) 合同研修会、ピアネット所属ユニットの協同プログラムの実施 (4) ピアネット・コンピテンシーおよびバリューループリックについて検証
達成指標	年度目標の達成率にて評価する。 S : 80%以上 A : 70-79% B : 60-69% C : 60%未満
<p>【重点目標】 教員・教員組織の年度目標(1)と教育研究等環境の年度目標(2)を総合し、終局的に次期(2022年度より)中期目標策定を重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 改組で引き継いだ76事業を整理した「LFセンター体制における引継ぎ業務の位置付け」に基づくSTP分析から「2021年度LFセンター業務案」をユニット・リーダー会議で共有している。中期的な本学の教育学習環境のイメージを、対面とオンラインの教育学習環境が共利共生する利活用など、リーダー会議で検討する。加えて、学内デジタルトランスフォーメーション整備を担うDXイニシアティブプロジェクトとの連携をしながら、教育開発支援機構内の点検や助言を得て、センター中期目標策定を目指す。</p>	

【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

教育開発・学習支援センターでは、「教員・教員組織」に関する2021年度を最終年度とする中期目標としては「教育および学びの質の向上に向けた全学的な教育支援策の企画、FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援を行う」ことが掲げられており、10項目の年度目標が示されている。「教育研究等環境」に関する2021年度を最終年度とする中期目標としては「教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援に向けた全学的な施策の企画・提案・調整を行う」ことが、掲げられており、4項目の年度目標が示されている。両者を総合した上で、2022年度より始まる次期の中期目標を策定することが2021年度の重点目標とされている。その目標を達成する具体的な施策として、リーダー会議がその任務をになう主体となることが示されている。リーダー会議での慎重な検討、およびそれを踏まえた新たな中期目標の設定を期待する。

市ヶ谷リベラルアーツセンター

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】(参考)

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2020年度に新カリキュラムの完成年度を迎えるため、その円滑な運営とともに、体系的(順次性)を重視した新カリキュラムの課題の抽出や見直しの検討が重要な目標となってくる。そのために、「ILAC新カリキュラムRebornプロジェクト」が発足されているので、それが中核になりながらも市ヶ谷関連6学部や各分科会ともしっかりと連携し、専門教育とも密接にかかわるところでもあるので、さまざまな事業・活動のリニューアル・リスタートに向けて長期的な視野に立って慎重な検討をされることを期待したい。

なお、新型コロナウイルス感染症を防止しながらの教育活動は全学的な課題であるが、オンライン授業における問題点の洗い出しや学生個々のケア、さらに対面型授業における問題点等を含めて、教育開発支援機構および3センターで力を合わせ、解決に取り組まれることを期待したい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2020年度で新カリキュラムの完成年度を迎えるため、教員および学生の視点に立って新カリキュラムを検証し、課題点を見出し、その改善・対応を行うことが重要である。

2020年度においては、市ヶ谷地区における幅広い教養教育の段階的・体系的な学修という理念のもとに、0群から5群まで幅広い履修を促す工夫の必要性から、「卒業所要単位の配分の見直し」を行った。100番台の基盤科目(0~3群、5群)および200番台のリベラルアーツ科目(0~5群)の履修要件単位を2単位追加することにより、明示的に単位化される履修の選択肢を必修・選択必修以外の各群まで拡大し、0群科目をはじめ、4年間を通して幅広い教養を体系的に学ぶ意義を涵養する枠組みを形成することになる。また、学生の幅広い履修意欲の増大に寄与できると考える。本変更は2022年度入学者から年次進行で実施される。(2020年度 第3回、第5回、第7回、第9回ILAC運営委員会)

また、新カリキュラムの課題の抽出や見直しの検討として、執行部および分科会における「ILAC新カリキュラムRebornプロジェクト」を2020年度も継続して行った。2019年度は、各分科会に新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について意見聴取し、2020年度は、分科会の課題・問題点に対する取り組み状況のフィードバックを報告書に作成・

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

提出していただいた。それを基に「2020年度「ILAC新カリキュラムRebornプロジェクト(Ver.1)」に関する分科会の課題点・その対応策等取り組み状況フィードバック一覧」としてまとめ、執行部と分科会の対応策と対応状況(【2019年課題・対応策】・<2020年度対応>・【ILAC執行部対応】)を抽出し、運営委員会で情報共有を行った。これについては、教授会主任2名と学部長会議選出学部長1名から成るILACの内部質保証委員会で点検・評価してもらい、また具体的な改善方法の提言をいただくことによって、ILAC内部の自立的で自律的な課題発見・課題解決・改善サイクルを構築した。(2020年度第6回、第7回、第10回ILAC運営委員会、2020年度内部質保証委員会)

さらに、300番台総合科目(教養ゼミ含む)のカリキュラム構造・階層のなかでの履修者等の現状、科目の位置づけ、見直しのあり方について、「総合科目・教養ゼミに関する課題・問題点と対応・改善について」という議題のもとに、各分科会に意見聴取を行った。その結果を一覧にし、情報共有したうえで、「総合科目・教養ゼミに関する課題・問題点と対応・改善について(確認と問題点の共有)」としてまとめ、過少受講人員になりがちな総合科目・教養ゼミの改善・対応策として、学習意欲のある学生が「教養ゼミ」を重複履修できる可能性を検討した。また、広報の強化の必要性が認識され、実際の履修対象学年である2~4年生に対しての実効性のある広報のあり方について今後、具体的に検討する必要があることを確認した。(2020年度第7回、第10回ILAC運営委員会)

ILAC科目の履修において、多くの学生が1,2年次で単位を取り終え、それ以上の履修につながらないのは、せっかくの履修科目スキームの体系化、順次性が十分に生かされていないことになる。ILAC科目が4年間を通して学べることを早期に学生に示す必要性があり、カリキュラムの周知徹底と4年間を通しての幅広い履修を促すため、ILACとILAC科目のカリキュラムを説明する動画「ILACとILAC科目について」を作成し、関連6学部の新入生ガイダンス時に活用できるようにお願いしている。この動画ファイル(<https://hosei-keiji.jp/ilac/class/ilac2021guidance/>)では、ILACカリキュラムの体系的性、順次性を視覚的に理解できるように工夫し、同時に300番台科目や専門科目とILAC科目の相互作用について理解が行き届くようにした。(2020年度第3回、第5回、第6回、第9回ILAC運営委員会)

学部(学部専門教育科目)とILAC(教養科目)との協働は、学生の知的形成を体系的に支える重要かつ必要な施策となる。ILACのカリキュラムは、各分科会はもちろん、市ヶ谷関連6学部の専門教育と密接にかかわりながら、連携してゆく必要がある。そこで、学部・ILACの協働について課題を発見・認識・共有し、議論を行い、また双方の要望や提案の一次的な回路・窓口となる常設的な懇談の場として、「ILAC運営委員教授会主任・ILAC執行部連携会議」を設けた。話し合われた内容についてはILAC運営委員会で報告し、透明性を保つこととした。(2020年度第6回、第7回、第8回ILAC運営委員会)

この会議で学部側から出された要望を受けて、ILAC執行部が提案し、成立した成果が「学部専門科目担当教員がILAC科目を希望する場合の手順について」であり、これを市ヶ谷リベラルアーツセンター規程施行細則(内規)に明文化した。これは分科会側が学部専門科目担当教員にILAC科目の担当をお願いする場合の手順も含み、ILACと学部の間で科目や人的リソースの交流が促進されるだけでなく、担当科目は総合科目を含めた既設科目のほか、該当する分科会や科目責任者との協議により、増コマを伴わない形で新設科目やオムニバス形式科目の設置も可能としているため、将来的にはILACと学部が共同でカリキュラムを考えていくこともありうるものとなる。市ヶ谷関連6学部とILAC、専門と教養との協働、融合、相互浸透を慎重に図ってゆくことが長期的な目標となるが、それを各分科会、関連6学部教授会の承認のもとで明示化できた意義は大きいと考える。(2020年度第9回、第11回ILAC運営委員会)

新型コロナウイルス対応が1年間を通じて大きな課題であったことは特筆されるべきことである。ILACでは、2020年度の授業実施について、学生側と教員側から意見を聴取し、運営委員会および分科会で情報を共有し、検討を行った。まず、学生側の意見聴取として、教育開発支援機構による2020年度学生モニター制度を活用し、2020年12月11日にZoomで実施した。執行部で作成した事前アンケートに参加学生全員にあらかじめ答えてもらい、それをクロス集計したうえで、モニタリングを行った。テーマは「ILAC教養教育とオンライン授業について」であり、学生側からの率直な意見・悩み・提案を伺い、これを報告書にまとめ、教育開発支援機構に提出すると同時に、ILAC運営委員会・分科会でも共有し、そのケアのあり方についても科目特性に応じた分科会での検討をお願いした。(2020年度第5回、第7回、第9回ILAC運営委員会)

また、2020年度が基本的にオンライン授業になったことに鑑み、授業担当者(教員)側からのオンライン授業に対するメリット・デメリット、工夫、試験・評価方法、実際の授業方法等の意見を聞くべく、春学期に大規模なアンケートを行った。すなわち、大規模授業を含む専任・兼任のILACの全科目授業担当者に対するILAC独自の「春学期オンライン授業アンケート」の実施である。その調査結果をクロス集計・グラフ化し、7月の第4回ILAC運営委員会での中間報告、9月の第5回ILAC運営委員会での最終報告に分けて説明し、ILAC運営委員会・分科会で共有、検討した。アンケートには自由記述欄を設けたが、数多くの意見があり、ILAC授業担当者(教員)側の問題点・課題点も把握することができた。このアンケート結果を情報共有することによって、秋学期には、ほかの授業担当者の取り組みや工夫を参考にしつつ、学生の学習指導をより適切に行うことができたと考えている。(2020年度第4回、第5回ILAC運営委員会)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

最後に、2019年度から始まった市ヶ谷キャンパスの8学部長とILAC長が構成メンバーとなっている「市ヶ谷コミュニティ連携会議」での取り組みは、2020年度には「ダイバーシティ・サティフィケート」プログラムとなって結実したが、ILACからも科目を提供したこと、また、全学部生の参加が可能である、0群設置の「課題解決型フィールドワーク科目 type B」に2020年度もILACから応募があり、2科目が採択・実施されたこと、さらに、イオン銀行寄付講座による「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」の応用・展開の位置づけをもち、2021年度から秋学期に開講される「リベラルアーツ特別実習」（国内外インターンシッププログラム。イオン銀行寄付講座）を0群に設置したこと、こうしたILACの教育活動は「千代田コンソーシアム」への多くのILAC科目提供と合わせて、閉じた教養教育ではなく、社会（企業、市民活動団体、あるいは他大学等）と広く連携しており、キャリア教育における学生の社会的、実践的な広い視野の形成に寄与していることを強調しておきたい。（2020年度第4回、第5回、第7回、第8回、第9回ILAC運営委員会）

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2020年度で完成年度を迎えた新カリキュラムに関して「ILAC新カリキュラムRebornプロジェクト」が継続して行われ、各分科会の課題・問題点に対する取り組み状況のフィードバックを報告書に作成、運営委員会で情報共有を行った。これに対し、ILACの内部質保証委員会による点検・評価がなされ、具体的な改善方法の提言を得た。ILAC内部で自立的な課題発見・課題解決・改善サイクルを構築した点は評価できる。新型コロナウイルス感染症禍のもと、ILAC独自の「春学期オンライン授業アンケート」を実施した。その調査結果を情報共有することによって、秋学期には、他の授業担当者の取り組みや工夫を参考に学生の学習指導をより適切に行うことができた点は評価できる。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S A B

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）では、0群から5群の科目群までそれぞれバランスよく履修できる科目を配置し、多岐の分野に亘る幅広い教養が身につけられるようカリキュラム編成している。

2017年度にスタートした新カリキュラムが、2020年度で完成年度を迎えた。新カリキュラムは、より順次的に、また、より体系的に教養教育科目を学べるように、従来「基礎科目」として一括されていたILAC各科目群を、ナンバリング100番台の〈基盤科目〉〈選択基盤科目〉、200番台の〈リベラルアーツ科目〉、300番台の〈総合科目・教養ゼミ〉と「三階建て」に再編したもので、これによって論理的な思考を順次高めていくことができ、総合的な判断力を形成できるフレームとなっている。また、0群において、現代的な視野と能力を形成する新しい取り組みの科目を導入・設置している。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2020年度においては、イオン銀行から講師を招き、共同で科目運営する「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」（0群設置）を開講実施した（新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインによる授業となった）。授業最終回にILAC執行部が参加し、イオン銀行側講師・担当者の方と実施状況、履修者の反応、成果、課題について意見交換をした。国内外のインターンシップをイオン銀行と共同で科目運営する「リベラルアーツ特別実習」を0群に設置することが審議・了承され、2021年度秋学期より開講する。「リベラルアーツ特別講座」「リベラルアーツ特別実習」の科目責任者はILAC副センター長が務める。

市ヶ谷リベラルアーツセンター長が市ヶ谷キャンパス8学部長とともに委員として参加している「市ヶ谷コミュニティ連携会議」において、学部・ILAC間協働の具体化として「ダイバーシティ・サティフィケート」が全学共通のプログラムとして検討され、このプログラムへの科目提供（「異文化コミュニケーション論 B」「比較文化 A」「Intercultural Communication B/C/D」「教養ゼミ I・II（現代社会の人権問題 A・B）」「教養ゼミ I・II（在日朝鮮人の歴史 A・B）」を行い、2021年度からスタートすることになった。法政大学の学生が等しく身につけているべき共通の教育としての「法政スタンダード」の策定のための検討は、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程のさらなる充実に寄与するものである。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ILAC 新設科目「リベラルアーツ特別実習」（2020 年度第 6 回 ILAC 運営委員会資料 5、第 7 回 ILAC 運営委員会資料 9）
- ・「ダイバーシティ・サティフィケート」プログラムへの科目提供（2020 年度 第 9 回 ILAC 運営委員会議事録「プロジェクト等の進捗状況について〈報告〉」）。

②初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S A B

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

新カリキュラムの「基盤科目」「基盤選択科目」は、高校までの学習と大学でのアカデミックな学習との橋渡しをする役割を自ずと果たしている。ILAC では 100 番台のナンバリングコードでそれを明示化している。

アカデミック・リテラシー習得の導入の役割をもつ初年次教育については、各学部主催の「基礎ゼミ」等と並んで、0 群には一部の学部・学科の初年次ゼミナールに相当する「基礎ゼミ」が開設されている。また 1 群（人文科学）には、大学生として必要なライティングのリテラシー能力や論文作成能力を育てる「文章論」という科目が開設されている。これらはナンバリングコードにおいて、初年次教育を表す BSP100LA（分野：初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育（Basic study practice））が付されている。

0 群のキャリア教育関連科目（次項③参照、ナンバリングコード CAR100LA 分野：キャリア教育（Career education）を付している）や自校教育科目（「法政学への招待」）も、主として 1・2 年次に履修されることを期して編成された、学部を越えた共通科目である。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ILAC の初年次教育の科目の多くが 0 群におかれていることから、分科会に意見集約を行ったうえで、100 番台の基盤科目（0～3 群、5 群）および 200 番台のリベラルアーツ科目（0～5 群）の履修要件単位を 2 単位追加するという卒業所要単位の配分の見直しの検討を行い、ILAC の卒業所要単位の配分変更を行った。これによって 0 群の科目を履修する動機を高め、また同時に、明示的に単位化される履修の選択肢を必修・選択必修以外の各群まで拡大し、幅広い履修の促し、学生の履修科目スキームの体系化、履修意欲の増大に寄与できる。2022 年度入学者から年次進行で実施する。
- ・学部の新入生ガイダンスで ILAC カリキュラムについて説明する動画ファイル「ILAC と ILAC 科目ガイダンス」を執行部が作成し、第 9 回 ILAC 運営委員会で完成版の上映をして承認後、関連 6 学部教授会で承認された。2021 年度から学部での新入生ガイダンスでの活用をお願いしている。これによって、新入生が大学の中での ILAC と ILAC 科目の群やナンバリングなどの構成を理解し、体系的、順次的な科目の履修を促すことになる。また、この動画を ILAC の web 掲示板に公開した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「ILAC カリキュラム卒業所要単位の配分変更について」（2020 年度第 3 回 ILAC 運営委員会議事録、第 5 回 ILAC 運営委員会資料 7、第 7 回 ILAC 運営委員会資料 2、第 9 回 ILAC 運営委員会資料 3）
- ・ILAC と ILAC 科目紹介・説明（動画コンテンツ）について（2020 年度第 3 回 ILAC 運営委員会議事録、第 5 回 ILAC 運営委員会資料 25、第 6 回 ILAC 運営委員会議事録、第 9 回 ILAC 運営委員会資料 19、動画コンテンツ <https://hosei-keiji.jp/ilac/class/ilac2021guidance/>）
- ・ILAC 科目シラバス <https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX>

③学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

0 群に設置されている「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン応用」は、キャリア教育運営委員会（ILAC センター長も委員として参加）が運営する実践的なキャリア支援教育科目である。ディスカッションやグループワークなどを通して課題発見・問題解決等の能力を養う授業が多く、FD 授業アンケートにおける学生の評価も毎年高い。キャリア教育運営委員会は、2017 年度に「（目先の就職活動に特化したようなプログラムではなく）正課の授業のなかにこそ就業力養成の意義がある」とする今までの教育理念・方針は堅持しつつ、キャリアセンターを中心として、インターンシップ・就職へも繋がる一貫したプログラムを実現すべく、新たなキャリア教育体制を再構築した。

このキャリア教育体制の強化方針に基づき、2018 年度から ILAC では新カリキュラムによる授業を行なっている。すなわち、既存のコマ配分を見直して新たに「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン応用」の 2 種とし、なるべく 1 年次春学期に導入科目である「キャリアデザイン入門」を履修できるようなカリキュラムに改訂し、2018 年度から実施している。

また、2019 年度より、英語学位コース（GBP, SCOOP）として「Elementary Career Development」、「Career Development Skills」を 0 群に設置し、キャリア教育運営委員長とともに共同で科目責任者となって、共同運営している。さらに、キャリア教育運営委員会の委員として ILAC 長は上記科目の授業参観を行い、授業に対するコメントを通して、質保証に資する提言等を行うことになっている仕組みを構築している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

イオン銀行寄付講座による「リベラルアーツ特別実習」(国内外インターンシッププログラム)を0群に設置した。これは春学期に置かれているイオン銀行寄付講座による「リベラルアーツ特別講座(金融リテラシー)」の応用・展開の位置づけをもち、秋学期に置かれ、2021年度から開講されるものである。海外でのインターンシップを含み、キャリア教育における学生の社会的、実践的な広い視野を形成することが期待される。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ILAC 新設科目「リベラルアーツ特別実習」(2020年度第6回 ILAC 運営委員会資料5、第7回 ILAC 運営委員会資料9)

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制及び方法】※箇条書きで記入。

- ・学生の履修指導は、学部の「履修の手引き」と全学共通仕様の Web シラバス(全文掲載)で行なっている。
- ・全般的な履修説明は学部ガイダンスで行われている。情報科学分科会、英語分科会、保健体育分科会でも、学部執行部に依頼して学部ガイダンスに必要な事項を反映させて行なったり、その場において独自に履修説明を追加したりしている。その他、特別なガイダンスが必要な科目においては、各科目担当者が初回の授業内でのガイダンスを行なっている(例;サイエンス・ラボ A・B、スポーツ総合演習)。
- ・窓口での履修指導は、各学部窓口と ILAC 事務局が共同して対応している。各科目には、専任教員の科目責任者を配置し、必要に応じて、科目責任者による指導も行う。保健体育分科会では、保健体育センター窓口でも履修指導を行なっている。
- ・ILAC ではシラバス通りに授業運営がなされたか、また、受講生の意見や授業アンケートの結果等を踏まえて、「後シラバス」(当該学期終了後のシラバス執筆者によるシラバスチェック=自己点検)を行っている。この「後シラバス」の実施率も調査し、ILAC 運営委員会で報告し、各分科会での実施向上を図っている。これによって学生の要望や意見を早めに自身の授業に反映することができる。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

学部の新入生ガイダンスで ILAC カリキュラムについて説明する動画ファイル「ILAC と ILAC 科目ガイダンス」を作成し、関連6学部の2021年度からの新入生ガイダンスでの活用をお願いしている。新入生が大学の中での ILAC と ILAC 科目を理解するために、0群から5群までの構成や100番台から300番台までのナンバリングなどの意味を説明し、卒業所要単位や学部専門科目とのつながり方など、学生が俯瞰的な視野にたつて履修構成を考えることができるようにし、体系的、順次的な科目の履修を促している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ILAC と ILAC 科目紹介・説明(動画コンテンツ)について(2020年度第3回 ILAC 運営委員会議事録、第5回 ILAC 運営委員会資料25、第6回 ILAC 運営委員会議事録、第9回 ILAC 運営委員会資料19、動画コンテンツ <https://hosei-keiji.jp/ilac/class/ilac2021guidance/>)
- ・後シラバス入力依頼・実施状況報告(2020年度第8回 ILAC 運営委員会資料21)

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

シラバスによる指導方針を明示し、個々の教員はオフィス・アワーを設定して個別指導を行なっている。また、各分科会はそれぞれ独自の学習指導体制を整えており、「基礎ゼミ」、「法政学への招待」、キャリア教育関連科目においても、それぞれを主管する組織体が独自に学習指導を行なっている。

2019年度秋学期期末「学生による授業改善アンケート」の集計結果、「学生による授業改善アンケート」に係る分析結果、2019年度「授業改善アンケート」全学集計結果報告書、「【大学評価室】2019年度卒業生アンケート調査結果について(報告)」、および LF センター実施の2020年度春学期オンライン授業に関するアンケート、秋学期オンライン授業に関する学生対象調査の集計結果も活用し、ILAC 運営委員会で提示・説明し、意見交換して、問題点を検討した。また、分科会委員長から各分科会メンバーに情報共有を図っている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2020年度が基本的にオンライン授業になったことに鑑み、大規模授業を含む専任・兼任の ILAC の全科目授業担当者に ILAC 独自の「春学期オンライン授業アンケート」を実施し、その調査結果をクロス集計またグラフ化し、7月の中間報告、9月の最終報告に分けて、ILAC 運営委員会で共有し、説明・検討した。また、質問項目以外に自由記述欄を設けており、多くの記述があった。このアンケート資料の結果を情報共有することによって、秋学期には、ほかの授業担当者の取り組みや工夫を参考にしつつ、学生の学習指導をより適切に行うことができた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度「学生による授業改善アンケート」全学集計結果報告書(2020年度第5回 ILAC 運営委員会資料18)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・2020年度「学生による授業改善アンケート」の実施について（2020年度第5回ILAC運営委員会資料9、第6回ILAC運営委員会資料9）
- ・「【大学評価室】2019年度卒業生アンケート調査結果について」（2020年度第5回ILAC運営委員会資料11、2020年度内部質保証委員会）
- ・「【LFC】2020年度春学期オンライン授業に関するアンケートについて」（2020年度第3回ILAC運営委員会資料11、第5回ILAC運営委員会資料10、第6回ILAC運営委員会資料8、第7回ILAC運営委員会資料7）
- ・「【LFC】秋学期オンライン授業に関する学生対象調査の集計結果について」（2020年度第9回ILAC運営委員会資料10、第11回ILAC運営委員会資料15）
- ・ILAC春学期オンライン授業アンケート（2020年度第4回運営委員会資料15、第5回ILAC運営委員会資料24）

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

シラバスに【授業外に行うべき学習活動（準備学習等）】を明示することで、学生の学習時間を確保することに努めている。この項目の記載については、年度末にすべての科目に関してシラバスチェックを行い、その指示が適正に行われていることを確認している。これに加えて、各分科会、基礎ゼミ担当学部、キャリア教育関連科目責任者、自校教育（「法政学への招待」）科目責任者が、それぞれに独自の方策をとっている。

大学設置基準に基づいた学生の授業の準備学習時間（予習・復習）を標準時間で必ずシラバスに記載することとした。シラバスの第三者確認を分科会委員長、科目責任者、執行部でチェックの責任を明確にした分担を行い、全科目の準備学習時間の記載が完全に行われているかの最終チェックを事務局と執行部が行い、100%の記載を確認している。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・シラバス第三者確認結果報告について（2020年度第1回ILAC運営委員会資料6）

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S A B

【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

- ・2014年度シラバスから「授業の概要と方法」の欄においてPBL（課題解決型授業）・グループワーク・プレゼンテーションの有無の記入項目が追加されたことを受けて、これらの方法を積極的に導入する科目が増えてきている。
- ・2017年度実施の新カリキュラムにおいて、「総合科目」内に演習形式の「教養ゼミ」を設置し（履修年次は2年生以上）、少人数によるアクティブラーニング授業として2018年度にスタートした。
- ・ILACではシラバス通りに授業運営がなされたか、また、受講生の意見や授業アンケートの結果等を踏まえて、「後シラバス」（当該学期終了後のシラバス執筆者によるシラバスチェック＝自己点検）を行っている。この「後シラバス」の実施率も調査し、ILAC運営委員会で報告し、各分科会での実施向上を図っている。これによって次回からの授業・教育の質の改善が見込まれる。
分科会単位で行われている特筆すべき取り組みは、以下の通りである。
- ・人文科学分科会が設置している「文章論」では、科目の開講当初より、テーマに沿った小作文執筆を受講生に課し、それに対する個別のコメントを含めた添削指導を学期内に複数回行うという形で、双方向授業を展開している。またそのうちの優れた作文をテキストとして使用し、受講生の文章を読みあうことで、高度な文章力についての認識を相互に深め合っている。
- ・社会科学分科会では、科目ごとに、音楽や映像を積極的に活用したり、独自作成資料を授業支援システムで配布したりするなどして、教育効果の向上に努めている。2018年度には、囲碁を用いて戦略的思考を学ぶ教養ゼミを開講した。「法学Ⅰ・Ⅱ」では、初学者に対する法学基礎の教育の充実に向けて、①法律学の一般的・包括的内容、②日本国憲法の基礎、③国際法の基礎の3つを柱として含んだ内容構成に科目全体で取り組んでいる。
- ・自然科学分科会の「サイエンス・ラボA・B」は文系キャンパスにおける貴重な理系実験科目である。当科目では、班分けすることによってグループで課題に取り組む環境を設定し、アクティブラーニングによる教育効果の向上に努めている。このほか、どの科目においても、文系学生にも分かりやすい理系の授業を心がけており、当分科会教員が参加する「自然科学センター」のサイエンス・コミュニケーション活動、「サイエンスカフェ」の催しも、文系学生に対する啓発に努めている姿勢の表れである。
- ・情報学分科会では、タイピングの速度を測定するソフトウェアを用いて目標を設定し、また文書作成・表計算・プレゼンテーションなどのソフトウェアを使える能力を上げるための練習問題を用意して学生に作成したファイルを提出させるなど、教員・学生双方が学習成果を具体的に測定しやすいよう工夫を行なっている（2、4②参照）。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・**英語分科会**では、習熟度別の少人数クラス編成で、学習者同士が習得言語を使った練習・交流・ディスカッション・発表など参加型の授業を行っている。また国際文化学部生を対象に、リスニングの自己学習を促すために、インターネット上の無料リスニング教材を紹介するハンドブックを配布し指導している。また、エッセイライティングの手引きとなるハンドブックも補助教材として使用している。
- ・**諸語分科会**では、語学教材だけでなく、政治・文化に関する視聴覚メディア・資料を採り入れ、また、独自に編集し作成したマルチメディア教材等も用いて、外国語を通して異文化の総合的理解を促す授業を拡大する（ドイツ語）、AV資料を適宜活用しながら学生の関心に沿った授業運営を行う（スペイン語）、授業における対面授業とeラーニングを利用した授業外学習を組み合わせたブレンド型学習を逐次拡大する（中国語）、視聴覚授業内容の年次別区分を新たに実施する（フランス語）、1年次授業で統一教科書を用いリレー方式の授業運営を行なう、また授業支援システムに副教材をアップロードして授業外学習に役立てる（朝鮮語）等、言語ごとの特性と実情に合わせた多様な試みが行なわれている。なお、学生アシスタント制度「ラーニング・サポーター」を活用して、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語は専任担当教員が運営責任者となっており、正課外のピア・ラーニング活動として「多言語カフェ」を運営し、留学生と当該語学履修者(学生)の協同によって学生の語学運用能力の向上に努めている。また、2020年度「ラーニング・サポーター」実施についても報告し、その活用が各分科会で決定した（2019年度第9回ILAC運営委員会）。
- ・**保健体育分科会**では、演習科目における実習において、以下に示した課題を通じてアクティブラーニングによる課題解決型の教育推進に取り組んでいる。
 - 1) 学生自身の体力を把握させるための体力測定（筋力・柔軟性・敏捷性・瞬発力）および身体組成測定を教材として扱い、学生相互に協力しながら測定に取り組める環境を設定し、測定結果を個々に分析し、体力に関する問題を見出させ、今後の課題を設定させている。
 - 2) 体力に関する今後の課題の解決に資する知識や方策を提供するとともに、その一端として、トレーニングセンター内の各種機材を安全かつ適切に使用するための指導を授業時間内に行うとともに、学生の将来の健康の保持増進に資する授業外に取り組むべき自己学習課題としてトレーニングセンターの活用を促し、教育効果の向上に努め、トレーニング環境の整備にも配慮している。
 - 3) 卒業後の実社会において極めて重要となる他者とのコミュニケーションを自然発生的に促すための方策としてスポーツ実技を教材としたグループワークを通じてリーダーシップの発揮や問題解決などの能力の啓発に努めている。
 - 4) 疾患または障がいなどを有し、基盤科目「スポーツ総合演習」の受講（前述の1～3）が困難である学生を対象とした「スポーツ総合演習（アダプテッド・コース）」を開講し、教育の質的保障に努めている。
- ・**基礎ゼミ**（文学部、キャリアデザイン学部等）は主体的な学びのためのアカデミック・リテラシーを修得させる少人数授業であり、プレゼンテーションやディスカッション、グループワークを積極的に採り入れたアクティブラーニング型の授業形態にしている。
- ・**「法政学への招待」**（自校教育）は自分の通う大学について知ることで、そこで学ぶ意義や役割を考える科目として開講された。本学の歴史や現在を扱う中で、地域連携活動や社会貢献、海外との交流にも重点を置くことで、国内的・国際的な幅広い視野を獲得できるように努めている。オムニバス形式でその都度適切な講師のキャスティングを行う一方で、常に科目責任者も参加することで、科目としての一貫性を保持している。毎回、授業の最後にクリッカーを使った振り返りを行い、学習内容を確認させている。グループワークの機会を数回程度設けて学生たちの主体的な参加を促している。とくに最終回の授業では、授業内容に基づいた大学の将来に対する提言を作成し、優秀な提言には総長が賞を与えることで大学に対する貢献の場を提供する。「法政学への招待」で得た興味関心をさらに発展できるよう、上位科目として「法政学の探究LA/LB」を開講し、体系化を図っている。
- ・**キャリア教育関連科目**では、独自に作成したビデオ教材を用いて、大学で学ぶことが将来の仕事にどう役立っているのかを理解させたり、グループディスカッションでテーマ設定をして意見交換をさせたりするなど、学生の参加意識を高めるようにしている。また2013年度に就業力を構成するコンピテンシーを測るために独自に開発した測定テスト（HAT）を受講者に対して継続的に実施するとともに、インターンシップの新方式として考案した、企業との提携によるビジネスコンテストへの受講生の参加など、授業の内外で動機付け・スキル取得・スキームの実践を図り、科目の持つ達成指標への到達度向上と同時に指標そのもののレベルアップに役立っている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組みあ事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの授業でリアルタイム双方向授業（Zoomなど）やオンデマンド（資料配信型）、フルオンデマンドなどオンライン授業を積極的に活用した。
- ・教育開発支援機構のプランに基づき、2019年度に社会（企業、市民活動団体等）と連携した課題解決型フィールドワーク科目 type B を0群に設置した。2020年度もILACからこの科目に応募があり、2科目採択・実施された。
- ・2020年度「ラーニング・サポーター」「授業支援アシスタント制度」実施について報告し、その活用が各分科会で決定した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・2020年度千代田区キャンパスコンソにILACから多くの科目を抛出した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・後シラバス (2020年度第8回ILAC運営委員会資料21)
- ・課題解決型フィールドワーク科目 for SDGs (2020年度第4回ILAC運営委員会資料6、第5回ILAC運営委員会資料14、第8回ILAC運営委員会資料10・資料22、第10回ILAC運営委員会資料10)
- ・2020年度・2021年度「ラーニング・サポーター」(2019年度第9回ILAC運営委員会資料13・資料14、2020年度第9回ILAC運営委員会資料17)
- ・2020年度・2021年度学生アシスタント制度「授業支援アシスタント」について(2019年度第9回ILAC運営委員会資料12・14、2020年度第4回ILAC運営委員会資料12、第9回ILAC運営委員会資料16)
- ・2020年度・2021年度千代田区キャンパスコンソ単位互換 提供科目 (2019年度第9回運営委員会資料5、2020年度第7回ILAC運営委員会資料6)
- ・ILAC科目シラバス <https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX>

⑤それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S A B

※どのような配慮が行われているかを記入。

- ・必修語学は一クラスの定員を設定し、少人数制授業の効果が出るよう配慮している。
- ・演習・実験科目や、ナンバリング300番台(高度な教養)の総合科目に関しても、定員制を採用する科目が多く、適正な受講者数を実現している。
- ・一般の講義科目については、過多(大規模)受講者授業に対してその適正化を図るため、学習権に配慮しながら、議論と検討を重ね、2019年度の承認に基づき、2020年度4月より事前抽選制を導入した。前年度の履修者が550人を超えた科目については翌年度は事前抽選対象科目とし、さらに原則300人以上550人以下(300人未満も可)を目安に各分科会で必要と認めた科目を抽選対象科目とするものである。この事前登録による抽選システム導入によっていわゆる大規模授業における一授業当たりの履修者数(学生数)の適正化が担保できるようになった。
- ・人間環境学部とキャリアデザイン学部の英語必修クラス授業の定員が、2018年度より、従来の28名以内から24名以内に改善され、市ヶ谷地区6学部平等の英語の授業環境が実現した。
- ・2019年度より諸外国語の必修クラス授業について、入学者の希望に、より即したクラス配分の改善案を執行部から提案し、承認を得た。
- ・大学の授業スリム化方針において、「例外科目」ルール作成を2018年度に引き続き行い、カテゴリーとして例外科目を策定することがあらためて承認された。それに基づいて、カテゴリー「文理融合科目」として「サイエンス・ラボA・B」をあらたに「例外科目」として承認した。その後も各分科会で、最新の各科目履修者数のデータ等をもとに、現場の切実な課題として、改善策も含めた対応に継続的に努めている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・大規模授業における事前登録抽選制の「履修の手引き」への記載、Web、HP等を通して抽選制導入とその方式について2020年3月の段階で学生への周知を行った。ただし、新型コロナウイルス感染拡大防止のための授業が1年を通して基本的にオンライン授業になったが、教育の質保証の観点から、大規模授業には抽選制を適用した。また、2021年度においても大規模授業には抽選制を適用することが承認された。
- ・「新カリキュラム施行に伴う履修者数動向表の分析について」(2019年度比項目あり)の資料提示をILAC運営委員会で行い、定員制限の効果(2019年度と比して平準化されたという分析)を分析、説明を行った。
- ・300番台総合科目(教養ゼミ含む)のカリキュラム構造・階層のなかでの現状・位置づけ・見直しについて分科会に意見聴取を行い、その結果を一覧にし、情報共有し、検討を行った。このなかで、過少受講人員のクラスについて、各分科会でその現状分析、改善策・対応検討を行い、学生数の適正化に努めている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度大人数授業抽選対象科目について」(2020年度第8回ILAC運営委員会資料20)
- ・「新カリキュラム施行に伴う履修者数動向表の分析について」(2020年度第3回ILAC運営委員会資料9、第7回ILAC運営委員会資料4)
- ・「総合科目・教養ゼミに関する課題・問題点と対応・改善について」(2020年度第7回ILAC運営委員会資料15(意見聴取)、第10回ILAC運営委員会資料18(確認と問題点の共有))
- ・2020年度諸外国語選択状況と2021年度コマ数決定方法について(2020年度第2回運営委員会資料4)

⑥通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。

※取り組みの概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>専任・兼任の ILAC の全科目授業担当者に ILAC 独自の「春学期オンライン授業アンケート」を Google フォーム (https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdj10Yj9QC9xGjMiUQHThsZUzBAA1lyQUghPP80U-QuPEqjtQ/viewform?usp=pp_url) にて実施し、その調査結果をクロス集計またグラフ化し、7月の中間報告、9月の最終報告に分けて、ILAC 運営委員会で共有し、説明・検討した。アンケート実施期間は7月3日～7月31日、回答数質問項目には、オンライン授業の授業方法や授業内容、その工夫や問題点、オンライン授業のメリット・デメリット、成績評価・試験の方法のついで項目がある。こうした質問項目以外に、自由記述欄を設けており、オンライン授業と学生指導に対する多くの記述があった。このアンケート資料の結果を情報共有することによって、秋学期には、ほかの授業担当者の取り組みや工夫を参考にしたり、取り入れたりすることができた。</p> <p>2020年度(2020年12月11日)に、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「ILAC 教養教育とオンライン授業」をテーマにしたモニタリングを行なった。オンライン授業について事前に参加学生にアンケートを配布し、回答させ、それを事前に分析、グラフ化、統計化、クロス集計した。その結果を「教育開発支援機構 2020年度学生モニター制度実施報告(ILAC 検討資料)」としてまとめた。また、ILAC 運営委員会で共有し、説明・検討し、各分科会での活用を促した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ILAC 春学期オンライン授業アンケート (2020年度第4回運営委員会資料15、第5回 ILAC 運営委員会資料24) 「学生モニター制度」についての報告・説明 (2020年度第5回 ILAC 運営委員会資料15、第7回 ILAC 運営委員会資料13、第9回 ILAC 運営委員会資料18) 	
<p>1.3 成績評価、単位認定を適切に行っているか。</p>	
<p>①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>【確認体制及び方法】 ※箇条書きで記入。</p> <p>シラバスの「成績評価基準」を明確化し、学生に公開することで公平性を担保している。成績評価規準が曖昧なシラバス原稿については、オンラインでのシステムがリニューアルされたことにもない、分科会委員長、科目責任者、執行部による第三者確認を行い、コメントをつけて本人への修正依頼が自動メール配信で行われ、確認完了までそれを繰り返すことによって、100%のチェックを完了した。その際に成績評価基準の%や数字表示による記載をすべての科目で行っている。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>専任・兼任の ILAC の全科目授業担当者に ILAC 独自の「春学期オンライン授業アンケート」を Google フォームにて実施し、その際、成績評価・試験の方法のついで項目を設け、そこでの方法や適切性について ILAC 運営委員会および各分科会で確認・共有した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ILAC 春学期オンライン授業アンケート (2020年度第4回運営委員会 資料15、第5回 ILAC 運営委員会 資料24、https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdj10Yj9QC9xGjMiUQHThsZUzBAA1lyQUghPP80U-QuPEqjtQ/viewform?usp=pp_url) 	
<p>1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。</p>	
<p>①成績分布の状況を把握していますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ</p>
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ILAC 全体としては、セメスター毎の GPCA 集計の結果を報告し、運営委員会を通じて分科会・学部で共有することで、横断的な成績評価の適切性を検証している。 自然科学分科会におけるオムニバス形式授業の「サイエンス・ラボA・B」では、全体的な成績の分布傾向を把握しており、授業間で GPCA に偏りがある時には兼任講師も含めた担当教員全体に周知されている。 諸語分科会の一部の言語では、統一試験を実施することによって市ヶ谷全体の成績分布を把握している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2020年度春学期 GPCA 集計結果 (2020年度第8回 ILAC 運営委員会資料6) GPCA 集計結果報告の Web 化について (2020年度第9回運営委員会 資料6) 	
<p>②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>ILAC 科目は、教養教育カリキュラムとして幅広い分野に亘り、豊かな多様性を特徴特長とするため、ILAC 全体(運営委員会)としては、FD 授業評価アンケートや卒業生・新入生アンケート、GPCA 分布等に関する ILAC カリキュラム全体の結果を成果指標として利用している。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

また、2019年度には教養教育の全体的な学習成果の測定方針として、ILACの「アセスメント・ポリシー」を策定し、これをILAC関連6学部提供し、学部「アセスメント・ポリシー」に適宜組み込む形式で指標の設定を明示的に行った。

さらに、以下に例示するような各分野（分科会）の特性に応じた分科会単位の取り組みを行っている。

- ・**情報学分科会**では、タイピングの速度を測定するソフトウェアを成果の指標に用いて、目標の入力速度を達成するように指導している。文書作成・表計算・プレゼンテーションなどのソフトウェアを使える能力の評価は、作成すべき文書・表・発表資料などを練習問題として提示し、学生に作成したファイルを提出させて成果の指標とし、それを3~4段階で評価するようにしている。
- ・**英語分科会**では、十分な検討を重ねてその信頼性が担保できる外部試験を活用し、さまざまな科目において習熟度別クラス編成を行い、また学生の英語運用能力の把握に努めている。また、1年次の必修クラス授業 English 1 で学生に書いてもらう「大学での英語学習計画」は、学生個々の卒業後の進路希望や4年間で身につける英語能力の具体的な目標、および1年間の目標（春学期初め）、そして学期末ごとに自らの学習成果を記述するシートであり、学習目標の設定や学びの省察を促す。
- ・**諸外国語分科会**（略称：諸語分科会）では、言語ごとに工夫が見られる。ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語・スペイン語では、毎回あるいは数回ごとの成果確認の指標として小テストが実施されている。また中国語では、現在促進しているブレンド型授業（教室での対面授業+授業外のeラーニング）の成果測定のために、授業外学習の履行を（web上で）チェックする体制をとっている。
諸語分科会全体として当然ながら、諸語をコミュニケーション言語とする諸語圏への留学者数や、各言語に関する検定試験の受験者数とその成績なども、大切な指標の一つとなっている。
- ・**キャリア教育関連科目**では、毎回の講義でのリアクションペーパーとともに、HAT（1.2④参照）の結果を用いて学生の指導を行っている。リアクションペーパーについては、毎回成績をつけ、定期試験の成績と総合して、最終の成績評価としている。また、HATについては、予算の制約もあって、全キャリア関連科目ではなく、一部の科目の受講生に実施している。
その結果と就職先の関係を分析すると、HATで高い点数を獲得した学生は、就職活動においても満足いく結果になっていることが確認できた。

上記は分科会単位の取り組み例であるが、授業担当者個々は、基本的に試験やレポートによる成績評価に基づき学習成果を測定しているほか、毎回の成果をリアクションペーパーにより調べている教員も多い。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・シラバスに「課題とそのフィードバック方法」についての記載を全科目において行い、ILACの科目に応じて、科目責任者、分科会委員長、ILAC執行部で第3者確認を行い、100%の記載を確認した。
- ・ILACの全科目授業担当者にILAC独自の「春学期オンライン授業アンケート」に課題出題の量やそのフィードバックの割合や実施の間隔について質問項目を設け、その結果を分析、ILACで情報共有した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・シラバス第三者確認（2020年度第1回ILAC運営委員会資料6）
- ・「私立大学等経常費補助金等に係る確認事項及び依頼事項」の作成について（2020年度第8回ILAC運営委員会資料13）
- ・ILAC春学期オンライン授業アンケート（2020年度第4回運営委員会資料15、第5回ILAC運営委員会資料24、https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdJ10Yj9QC9xGjMiUQHThsZUZBAAllyQUghPP80U-QuPEqitQ/viewform?usp=pp_url）

③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。

ILAC全体（運営委員会）では、FD授業改善アンケートの結果のほか、卒業生アンケートや新入生アンケートの満足度や「授業で身についたこと」（卒業生）についての集計結果等を運営委員会にて資料として示し、執行部の分析報告のち意見交換を行い、情報を共有している。

分科会単位の取り組みについては前項1.4②に例示した通りであり、運用は各分科会・セクションに一任されているが、個々の取り組みの報告は内部質保証委員会のチェックを経て運営委員会で紹介され、相互啓発を期して情報共有される。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

教育開発支援機構で行われた「オンライン授業学生アンケート」を各分科会で学習成果に対する学生の意見を検討・活用するよう、ILAC運営委員会で情報共有し、執行部の分析を説明した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「【LFC】2020年度春学期オンライン授業に関するアンケートについて」（2020年度第3回ILAC運営委員会資料11、第5回ILAC運営委員会資料10、第6回ILAC運営委員会資料8、第7回ILAC運営委員会資料7）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・「【LFC】秋学期オンライン授業に関する学生対象調査の集計結果について」（2020年度第9回ILAC運営委員会資料10、第11回ILAC運営委員会資料15）

1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。

①学習成果を組織的・定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

- ・2017年度のILAC内部質保証委員会にて、新カリキュラムの体系的（履修の順次性）の成果を測るための新規の指標を導入する必要性が提起され、具体的なアイデアとして6学部の学生の成績サンプル調査を2018年度に試行した。
- ・授業改善アンケートの項目のなかで主として「平均予習・復習時間」「授業で身についたこと」の結果について、運営委員会において審議の後、学部・分科会で共有することで、検証を行っている。
- ・「法政学への招待」（自校教育）およびキャリア教育関連科目では、定期的に開催されるそれぞれの運営委員会で教育成果の検証をおこなっている。
- ・2019年度12月に、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「市ヶ谷教養教育（ILAC）のカリキュラム内容、学修方法について」をテーマにしたモニタリングを行なった。その際、まず事前アンケートを参加学生全員に回答してもらい、その結果を執行部で問題点・テーマ別にクロス集計し、そのうえでモニタリングに臨んだ。また、モニタリングの結果を「教育開発支援機構 2019年度学生モニター制度実施報告（ILAC検討資料）」としてまとめ、資料を2019年度第11回運営委員会にて配布・報告した。また、この資料をもとに、「ILAC新カリキュラム Rebornプロジェクト」シートにまとめ、ILAC新カリキュラム Rebornプロジェクトを発足させた。このモニタリングによって学生の視点からみた新カリキュラムの課題点・問題点、科目の受講・登録の際の利便性、履修指導や科目への要望等を認識することができた。
- ・2019年度には、新カリキュラムにおける学生の科目の履修状況に対する分析を通して、新カリキュラムの順次性と体系的成果を測定し、また課題点を発見することを目的とした年次別履修状況サンプル調査を行った。本調査は、年次別、GPAスコア別の単位履修状況、体系的（順次性）を意識した履修計画の有無、履修した科目の成績、さらに所要単位以上の履修状況にも着目することによって、総合科目・教養ゼミ、選択科目等に対する学生の興味・関心ある分野等を調査するために、ILAC参加6学部の学生から、計48名を抽出して行うものであるが、新カリキュラムの成果や課題点の抽出も検証している。この検証結果を「ILAC科目（旧市ヶ谷基礎科目）年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」レポートにまとめ、ILAC運営委員会に提示し、説明・検討を加え、さらに「ILAC新カリキュラム Rebornプロジェクト」シートにまとめ、ILAC新カリキュラム Rebornプロジェクトのひとつの柱とした。
- ・「アセスメント・ポリシー（「学習成果の把握に関する」方針に基づく特色ある取り組み—ILAC（市ヶ谷リベラルアーツセンター）の取り組み例）2019年度第2回学部自己点検懇談会（発表型）2020年2月27日」PowerPointファイル（新型コロナウイルスによってファイルによる閲覧形式となった。URL：<https://dnet.hosei.ac.jp/cgi-bin/dneo/z.cgi?1is9hqmx0rlo>（3月3日大学評価室発【大学評価室】「2019年度第2回自己点検発表資料の共有について」）および2019年度第9回運営委員会資料7）
- ・ILACを構成する7分科会に（諸語分科会ではドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、朝鮮語、ロシア語、日本語の各言語部会に）ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について、現状、現在の/今後の対応策、それによって見込まれる展望等について検討を依頼し、各分科会はその検討結果を報告書（「ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」全部で14の報告書）にまとめ、運営委員会で提示・説明・情報共有を行った。これに基づいて2020年度から新カリキュラムの多岐にわたる改善、構造的なリニューアルを行うことにしている。また、分科会とILACがどのように取り組むかを分科会別に示した一覧を「ILAC新カリキュラム Rebornプロジェクト」シートに編入し、ILAC新カリキュラム Rebornプロジェクトの基礎資料とした。
- ・「キャリアデザイン入門」については同科目担当者で「「キャリアデザイン入門」勉強会」を開き、授業に関する情報共有、課題点の発見・指摘、また改善を行っている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2020年度（2020年12月11日）に、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「ILAC教養教育とオンライン授業」をテーマにしたモニタリングを行なった。事前に参加学生にアンケートを配布し、回答させ、それを事前に分析、クロス集計した。その結果を「教育開発支援機構 2020年度学生モニター制度実施報告（ILAC検討資料）」としてまとめ、資料を2020年度第9回運営委員会にて配布・報告した。
- ・2019年度に行った「ILAC新カリキュラム Rebornプロジェクト」にもとづき、2019年度に各分科会で挙げた課題・対応策のフィードバックとして、2020年度における取り組み状況の意見聴取を各分科会から行い、また執行部・ILAC全体の取り組み状況のフィードバック一覧を作成・提示し、ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

点について(全14報告書)に関する各分科会の取り組み状況のフィードバックとあわせて執行部がまとめ、情報共有した。

- ・このフィードバックをさらに ILAC 内部質保証員会で検証・評価するという自立的かつ自律的自己評価・改善サイクルを ILAC のなかに構築した。
- ・300 番台総合科目(教養ゼミ含む) のカリキュラム構造・階層のなかでの現状・位置づけ・見直しについて分科会に意見聴取を行い(第7回 ILAC 運営委員会)、その結果を一覧にし、情報共有し、検討を行っている(第10回 ILAC 運営委員会)。
- ・上記の検討結果を基礎資料として ILAC では新カリキュラムの構造的な改善を継続的に行う「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」を2019年度に発足させたが、2020年度もこれを継続した。今後もこのプロジェクトを継続することによって、ILAC 科目やカリキュラムの構造的な改善を継続的に行うことができる。またこれを教授会主任2名と学部長会議から選出された学部長1名からなる(輪番制)内部質保証員会で検証してもらうことによって、第三者的な視点から対応策や課題点を評価、あるいは提案され、全体として客観性を担保できるようになった。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「教育開発支援機構 2020年度学生モニター制度実施報告 (ILAC 検討資料)」(2019年度第9回 ILAC 運営委員会資料 21)
- ・「2020年度 ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」(2020年度第6回 ILAC 運営委員会資料16・資料17、第7回 ILAC 運営委員会議事録、第10回 ILAC 運営委員会資料17)
- ・「2020年度 ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」(全14報告書)(2020年度第10回運営委員会資料17)
- ・「総合科目・教養ゼミに関する課題・問題点と対応・改善について(確認と問題点の共有)」(2020年度第7回 ILAC 運営委員会資料15、第10回 ILAC 運営委員会資料18)
- ・「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト (Ver.1)」シート(2020年度第6回運営委員会資料16)
- ・第1回キャリア教育運営委員会、日時:2020年7月15日、ツール:新型コロナウイルスのためZoomを使用したオンライン会議(「2020年度 第1回キャリア教育運営委員会の開催について(通知)」議題含む)
- ・「キャリア教育意見交換会(「キャリアデザイン入門」担当教員振り返り)含む」(報告:大八木委員)(キャリア教育運営委員会、2020年8月27日開催、Zoom形式)
<https://hosei-ac-jp.zoom.us/j/96292090880?pwd=M0pVNGNWTkNySD1SUzhhYVNXekNOUT09>

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S A B

※利用方法を記入。

前年度の授業改善アンケートの各設問の結果について、運営委員会において分析・考察し、分科会・学部と情報共有を行っている。

各教員にはシラバス入力項目として「学生による授業改善アンケートからの気づき」を設定し、授業改善アンケートに基づく改善内容の公開を義務づけている。ただし「法学への招待(自校教育)はオムニバス形式であり、平準化して書くことが難しいと思われるため、既成の授業改善アンケートは実施していない。その代わりに、リアクションペーパーを毎回書かせてフィードバックしているほか、学期末試験の際に独自アンケートを実施し、それらを集計・分析して受講学生の現状把握や授業の改善に活用している。そうした受講生の声をまとめて、大学のWEB上で紹介している。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度「学生による授業改善アンケート」全学集計結果報告書(2020年度第5回 ILAC 運営委員会資料18)
- ・2020年度「学生による授業改善アンケート」の実施について(2020年度第5回 ILAC 運営委員会資料9、第6回 ILAC 運営委員会資料9)
- ・ILAC 科目シラバス <https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・ILAC は分野が人文、社会、自然科学、情報処理、外国語、保健体育と多様であり、それらが基本	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>的に関連6学部の学生に開かれている。また0群という先端的、特徴的な科目群を持ち、そのなかには自校教育である「法政学」、初年次教育またリメディアルの要素も持つ「基礎ゼミ」「文章論」「情報処理演習」などがあるが、2019年度にはあらたに「課題解決型フィールドワーク for SDGs」が設置され、2020年度から開講されるイオン銀行と共同で行う「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」の設置が2019年度に承認され、その応用・展開である「リベラルアーツ特別実習」（2021年度開講。イオン銀行による寄付講座緒）の0群に設置が2020年度に承認された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ILACの多様な科目群において、学修成果の把握は科目担当者ごと、部会、分科会単位で厳密に行われており、また2019年度に作成したILACの「アセスメント・ポリシー」を関連6学部に提供し、学習成果の把握を客観的なものにしていく。 ILAC全体としては、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「市ヶ谷教養教育（ILAC）とオンライン授業」をテーマにしたモニタリング、7分科会が調査、検討してまとめた「ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」レポートから学修成果を俯瞰的に概観でき、新カリキュラムの順次性と体系性の成果を測定し、また課題点を発見できる一次資料を構築できたことの意味は大きく、今後も継続したい。 	
---	--

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>2020年度から新カリキュラムの検証を行っているが（「ILAC新カリキュラム Reborn プロジェクト」）、そうした俯瞰的な検証をまた、分科会、部会、科目担当者にフィードバックして、科目/科目群特性に応じて、様々な手法を用いた個別の学習成果の把握・測定を行うというサイクルを継続して行うことが重要かつ必要である。また、オンライン授業という新しい授業形態をはからずとも全学的に利用することになり、今後はそれがいわば普遍的でファンダメンタルな授業形態として定着してゆくことを鑑みれば、「対面授業かオンライン授業か」、「対面授業とオンライン授業のどちらがいいのか」という二項対立の図式ではなく、それぞれの特質やメリット・デメリットを検証していき、有効に活用し、オンライン授業という形態でいかに授業目的を効率的に達成するか、その方法や検証方法を考えていくことが課題となる。</p>	

【この基準の大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2017年度にスタートした新カリキュラムは2020年度で完成年度を迎えた。従来「基礎科目」として一括されていた科目が「三階建て」に再編され、より体系的な学びができるようになったことは評価できる。初年次教育・高大連携については、フレキシブルなカリキュラム編成となっており、適切な配慮がなされている。キャリア教育については、適切に提供されている。2020年度からはイオン銀行と共同で行う「リベラルアーツ特別講座」が開講され、2021年度にはその応用・展開である「リベラルアーツ特別実習」が開講されている。履修指導は、各学部の「履修の手引き」と全学共通仕様のWebシラバスで行われており、適切である。2021年度には動画「ILACとILAC科目ガイダンス」を作成し関連6学部の新入生ガイダンスでの活用を依頼している。学習指導は、シラバスによる指導指針が明示され、個々の教員のオフィス・アワーが設定され、個別指導を行っている。シラバスに「授業外に行うべき学習活動」が明示され、学生の学習時間を確保している。また、大規模授業を含む専任・兼任のILACの全科目授業担当者にILAC独自の「春学期オンライン授業アンケート」を実施している。その調査結果は共有され秋学期での学習指導に活かされていることは評価できる。各授業あたりの学生数について、必修語学は少人数制授業、演習・実験科目や総合科目においても定員制を採用し、適切である。成績評価基準の適切性について、シラバスの「成績評価基準」の明確化を通じてその公平性を担保するとともに、シラバスの第三者確認の担当を明確化し、100パーセントの確認完了となるまで事務局と執行部が最終調整を行い、成績評価と単位認定の適切性を確認したことは大いに評価できる。成績分布の状況は、運営委員会においてセメスター毎にGPCA集計の分布を通じて行われ、横断的な成績評価の適切性が検証されている。学習成果の測定は、各種アンケートに加え、各分科会で測定方法を工夫しており、評価できる。2020年度には学生モニター制度を利用し「ILAC教養教育とオンライン授業」をテーマとしたモニタリングを行っている。その調査結果で得られた新カリキュラムの問題点や課題が次の改善に繋がることを期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2 教員・教員組織

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①センター内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S A B
<p>【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。</p> <p>授業改善アンケートを分野別・言語別・学部別等に集計し、その集計結果をFDの素材として各分科会・学部で共有してきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3種類の授業参観（相互授業参観、新人研修としての授業参観、ビデオカメラを用いたセルフ授業参観）を設定し、各分科会・学部の状況に合わせた形式で実施している。また、各分科会で専任・兼任講師合同の「FD懇談会」も開催している。 ・センター内に内部質保証委員会を設置し、質保証についての検討を適宜行っている <p>【2020年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下記の根拠資料2点目（2020年度内部質保証委員会資料）のうち、67頁以降のFD授業参観実施状況報告集（67～77頁）参照 <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「相互授業参観」において、当該年度着任の専任教員については必ず授業参観を行うルールを策定し、今年度を実施した。 ・ILAC関連6学部ILAC運営委員教授会主任とILAC執行部の連携会議を設置することを提案・審議・承認され、第1回連携会議を行った。そこでは、学部側とILACとの意見交換や要望、提案がILAC運営委員会の議題とは別に自由に行われ、その議論を次回のILAC運営委員会で報告し、透明性を図るとともに、分科会と情報共有した。これによって科目また人的リソースにおいてILACと学部の協働が大きく促進される基盤と提案の場所が設計された。 ・上記の連携会議での意見に基づいて「学部専門科目担当教員がILAC科目を希望する場合の手順」を策定し、ILAC運営委員会、各教授会で審議し、内規として承認された。これによって学部専門科目担当教員がILAC科目を希望する場合、また逆にILAC分科会が学部専門科目担当教員に科目担当をお願いする場合の両方の手順が明示化され、さらに既存科目だけではなく、新設科目を共同で考えていくことも可能であるので、ILACと学部の協働がルールに基づいて活発となることが期待される。 ・ILACでは新カリキュラムの問題点・課題点・その改善策や対応を各分科会に意見聴取し、その構造的な改善を継続的に行う「ILAC新カリキュラムRebornプロジェクト」を2019年度に発足させ、2020年度もこれを継続したが、これを教授会主任2名と学部長会議から選出された学部長1名からなる（輪番制）内部質保証委員会で検証してもらうことによって、ILAC内のFD活動を第三者的な視点から客観性を担保しつつ、適切にかつ継続的に行っており、またそのサイクルを構築した。 ・300番台総合科目（教養ゼミ含む）のカリキュラム構造・階層のなかでの現状・位置づけ・見直しについて分科会に意見聴取を行い、その結果を一覧にし、情報共有し、検討を行った。 <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年度内部質保証委員会実施報告（2020年度第11回ILAC運営委員会資料22） ・「2020年度内部質保証委員会資料」（2021年3月26日実施。2021年度第1回運営委員会にて配布・回覧予定） ・「ILAC運営委員会教授会主任・ILAC執行部連携会議の設置について」（2020年度第6回ILAC運営委員会資料18、第7回ILAC運営委員会資料16、第8回ILAC運営委員会資料18） ・「学部専門科目担当教員がILAC科目を希望する場合の手順について」（2020年度第9回ILAC運営委員会資料4、第11回ILAC運営委員会資料5） ・「2020年度ILAC新カリキュラムRebornプロジェクト」、ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について（全14報告書）（2020年度第6回ILAC運営委員会資料16、第7回議事録、第10回ILAC運営委員会資料17） ・「総合科目・教養ゼミに関する課題・問題点と対応・改善について」（2020年度第7回ILAC運営委員会資料15（意見聴取）、第10回ILAC運営委員会資料18（確認と問題点の共有）） 	
②組織編制やFD等に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。	
※取り組みの概要を記入	
特になし	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>市ヶ谷関連 6 学部の教養教育の、セメスター単位で 2000 コマ超の授業を管理運営する学部間協働の運営組織として、現在の制度、枠組み、組織体制のスキームの中ではカリキュラム設計・運営、授業管理、組織運営等十分有効に機能しているといえる。</p> <p>これまで専門教育と教養教育がそれぞれ独自にカリキュラム設計や科目担当をしていたが、ILAC 関連 6 学部 ILAC 運営委員教授会主任と ILAC 執行部の連携会議を設置することによって、学部専門教育を主とする教員と教養教育を担う教員と共同で、教養教育の科目を担当し、またカリキュラム設計自体をすり合わせて行うといった協働体制の第一歩が築けた。この連携会議では、学部側と ILAC との意見交換や要望、提案が自由に行われ、まずは、上記の連携会議での意見に基づいて「学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合の手順」を策定し、内規として承認された。これによって学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合、また逆に ILAC 分科会が学部専門科目担当教員に科目担当をお願いする場合の両方の手順が明示化されたが、これは既存科目だけではなく、新設科目を共同で考えていくことも可能であるので、理想的にはカリキュラムの共同制作ということも可能になる。いずれにせよ、ILAC と学部の協働が活発となることが期待される。</p> <p>また、ILAC 執行部会議、ILAC での様々な次元での対応においては学部のそれに比して事務課長・事務主任を始めとする事務局の貢献は特筆されてよい。事務的な処理にとどまらず、さまざまな調査・統計、企画立案、施策改善・対応策、施策実施後の将来展望などをともに構築していくことによって、市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC) は最大限のパフォーマンスを発揮し得ているといえる。こうした観点から事務局が果たす役割は教員・職員の協働参画のモデルケースといえる。</p>	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>「教養教育」の重視は大学の認識であり、いわゆる 1 表・2 表教員を問わず、各学部の専門教育課程と ILAC 科目のカリキュラムとの垣根をこえて俯瞰する柔軟な視野が求められる。専門教育と教養教育がそれぞれ独自にカリキュラム設計や科目担当をしている限界を乗り越えるために、上記「(2) 長所・特色」に記したように、ILAC 関連 6 学部 ILAC 運営委員教授会主任と ILAC 執行部の連携会議を設置し、「学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合の手順」を策定し、内規としたが、協働の進化のためには、学部専門教育を主とする教員と教養教育を担う教員との科目担当だけではなく、カリキュラム設計面での協働体制が今後は提案・実行されてゆく必要がある。</p> <p>2019 年度に ILAC の着実な運営のために「センター長選出方法の一部改正について」の提案を行い、承認された。そこでは「将来的に、学部持ち回り（一表、二表を問わない）による選出方法も考慮に入れて、学部専門教員の市ヶ谷教養教育へのコミットを促進する施策を同時に進める。」という文言を入れることによって、こうした協力関係、相互浸透を作り上げていく協働体制を意識化している。こうした土壌のもとに、2021 年度からは、いわゆる一表教員が初めて ILAC 執行部となり、学部専門科目教員と ILAC 科目担当教員との協働体制のひとつの具現化と評価できよう。</p> <p>なお、市ヶ谷コミュニティ連携会議に市ヶ谷地区の 8 学部長とともに、ILAC センター長が参加し、学部横断的なカリキュラム「ダイバーシティ・サティフィケート」プログラムの成立に至った (ILAC から科目提供) こともそうした協働のひとつと捉えられるし、教育開発支援機構のプランに基づき、社会（企業、市民活動団体等）との連携を目指し、ILAC の 0 群に設置した「課題解決型フィールドワーク科目 type B」には、2020 年度も ILAC からこの科目に応募があり、2 科目採択・実施されたが、これは ILAC 関連 6 学部に限らず、多摩キャンパスの学部を含めた全学部からの学生参加である。今後はこうした学部横断的なプログラムへの積極的な科目提供や教員参加が</p>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

課題となる。

【この基準の大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでのFD活動は、授業改善アンケート、3種類の授業参観、センター内の内部質保証委員会を通じて行われており、適切である。「学部専門科目担当教員がILAC科目を希望する場合の手順について」が、市ヶ谷リベラルアーツセンター規程施行細則に明文化されたことは、学部専門教育科目と教養科目との協働を図る長期的な目標に沿うもので評価できる。ILAC執行部会議やILAC活動におけるさまざまな対応については、事務局の貢献が大きく、教員・職員の協働参画の優良事例として学内のモデルとなりうるものである。

III 2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	2017年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料とした議題を運営委員会において設け、各学部・分科会独自のアイデア・提案も募りながら、市ヶ谷地区における教養教育の幅を広げる（リソースをさらに豊かにする）ことをめざした議論をおこなう。	
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 学部・ILACが共同して、市ヶ谷地区の共通の教養教育の在り方の可能性について、検討する。 新カリキュラム完成年度（2020年度）を迎えて、各分科会や学生モニター制度活用のモニタリングにおいて2019年度にあがってきた課題を検討する。 	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ILAC長がメンバーとして参加している市ヶ谷コミュニティ連携会議において、市ヶ谷地区の共通の教養教育のプログラムの可能性について検討する。 新カリキュラムにおける課題のひとつである卒業所要単位の配置・構成について検討する。 	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		<ul style="list-style-type: none"> ILAC長が市ヶ谷キャンパス8学部長とともに参加している市ヶ谷コミュニティ連携会議において、学部・ILAC間協働の具体化として「ダイバーシティ・サティフィケート」が全学共通のプログラムとして検討され（第9回ILAC運営委員会で報告）、2021年度からスタートすることになった。 卒業所要単位の配分の見直しの検討を行い（第3回ILAC運営委員会で頭出し、第5回で意見集約、第7回で提案）、第9回ILAC運営委員会、その後、学部教授会で審議、承認され、2022年度より実施される。 	
改善策	-		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> 少人数制授業科目におけるアクティブラーニングの促進や課題解決型授業の新規導入をはかる。 学部専門教育カリキュラムとILACカリキュラムの有機的なつながりを学生に理解させるため、各学部の新入生ガイダンス等の改善を工夫する。 	
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 学部の新入生ガイダンスでILACカリキュラムについて説明する場・機会と資料提供の2021年度の実施を目指す。 カリキュラムマップ・ツリーの視覚的体系性・順次性可視化の向上と一覧性の改善に向けて検討を開始する。 	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 学部の新入生ガイダンスでILACカリキュラムについて説明するための資料を制作する。 カリキュラムマップ・ツリーのリニューアルに着手する 	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		<ul style="list-style-type: none"> 学部の新入生ガイダンスでILACカリキュラムについて説明する動画ファイル「ILACとILAC科目ガイダンス」を執行部が作成し（第3回ILAC運営委員会で頭出し、第5回で報告・説明、学部への要請）、第9回ILAC運営委員会で完成版の上映をして承認後、学部教授会で承認された。2021年度から学部での新入生ガイダンスでの活用をお願いしている。 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			<ul style="list-style-type: none"> この動画ファイルの中の「体系的学びのすすめ」「4年間を通じて学ぶ」のスライドにおいて、カリキュラムの視覚的体系的・順次性可視化を行い、また学部専門教育カリキュラムとILACカリキュラムのシナジー効果についても言及した。「総合科目・教養ゼミに関する課題・問題点と対応・改善について」の意見聴取・提案も300番台と200番台科目との体系的を見直すカリキュラムマップ・ツリーのリニューアルの位置づけを持つ。
		改善策	—
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
3	中期目標	2017年度にスタートした、体系的（順次性）を重視した新カリキュラム（昨年度入学者から適用）の成果は、本格的には完成年度（2020年度）をもって明らかになるが、それまでに暫定的な成果を調べるため、新たに幾つかの指標を導入する。	
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 新カリキュラム完成年度の成果指標として、「学生モニター制度」を今年度も実施し、学習成果測定に関するモニターを行う。 「新カリキュラムRebornプロジェクト」にもとづきカリキュラムの体系的・順次性に関する課題改善を検討する。 	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 事前アンケートを伴う「学生モニター制度」を活用し、学習成果測定に関する学生モニタリングを実施する。 カリキュラム構造（階層のありかた）の検討・議論を開始する。 	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		<ul style="list-style-type: none"> 「学生モニター制度」を活用し、学生モニタリングを実施した（12月11日Zoom利用）。またその際に、事前アンケートを行い、グラフ、統計を行い、それも含めて第9回ILAC運営委員会で報告・説明した。 Rebornプロジェクトにもとづき、2019年度において各分科会で挙げた課題・対応策のフィードバックとして、2020年度における取り組み状況の意見聴取を行い、また執行部・ILAC全体の取り組み状況のフィードバック一覧を作成・提示し（第6回ILAC運営委員会）、各分科会の取り組み状況のフィードバックとあわせて執行部がまとめ、情報共有し、さらに内部質保証委員会で検証するという自律的改善サイクルを構築した。（第9回、第10回ILAC運営委員会） 300番台総合科目（教養ゼミ含む）のカリキュラム構造・階層のなかでの現状・位置づけ・見直しについて分科会に意見聴取を行い（第7回ILAC運営委員会）、その結果を一覧にし、情報共有し、検討を行っている（第10回ILAC運営委員会）。 	
改善策	—		
No	評価基準	教員・教員組織	
4	中期目標	2017年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料として、6学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化をめざす。	
	年度目標	ILAC関連6学部協働で教養教育にコミットする方法について議論を開始する。	
	達成指標	関連6学部教授会主任と分科会委員長が教養教育について共同で意見交換のできる場の創出について検討する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		<ul style="list-style-type: none"> 関連6学部ILAC運営委員教授会主任とILAC執行部の連携会議を設置することを提案・審議・承認され（第6回ILAC運営委員会）、11月14日に第1回連携会議を行った。そこでの議論を第8回ILAC運営委員会で報告し、分科会委員長と情報共有した。また、連携会議での意見に基づいて「学部専門科目担当教員がILAC科目を希望する場合の手順」を策定し、ILAC運営委員会、各教授会で審議した（第9回ILAC運営委員会）。これによって科目また人的リソースにおいてILACと学部の協働が促進される。 	
改善策	—		
No	評価基準	教育研究等環境	
5	中期目標	履修者数が教室定員を超過する大人数授業が少ないILAC科目において、適正な授業環境の確保（履修者数の調整）に努める。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	2020年度から実施される大規模人数授業のweb事前登録抽選制について、適切な実施過程、周知過程、抽選制実施後の改善状況の把握、問題点の把握を行う。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・抽選制の実施過程・周知過程を振り返る。 ・抽選制となった授業の改善状況の調査を開始し、検討する。 ・課題点の調査を開始し、検討する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
		自己評価 S
		理由 「履修の手引き」、Web、HP等を通して抽選制導入とその方式について3月の段階で周知した。ただ、今年度は新型コロナウイルスのため、授業が1年を通して基本的にオンラインとなり、具体的に抽選制の効果を測定する状況とはならなかった。ただし、大規模授業を含むILACの全科目担当者に「春学期オンライン授業アンケート」を実施し、その調査結果をILAC運営委員会で共有し、説明した(第4回、第5回ILAC運営委員会)。また教育の質保証の観点から、2021年度においても大規模授業には抽選制を適用し(第8回ILAC運営委員会)、また、「新カリキュラム施行に伴う履修者数動向表の分析について」(2019年度比項目あり)の資料提示をILAC運営委員会で行い、定員制限の効果(2019年度と比して平準化されたという分析)を分析、説明を行った(第7回ILAC運営委員会)。
		改善策 新型コロナウイルス感染対策のため、2021度も大規模授業オンライン(オンデマンド)授業が予定されている。大規模授業のオンライン授業における適正な授業環境やその効果測定のありかたをも考える必要があると考えらえる。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
6	中期目標	自然科学センター(自然科学分科会教員が参加)ですでに実績がある、一般市民や児童への啓発活動「サイエンスコミュニケーション」や、社会連携の「窓口」的な意義を有しているゼロ群のキャリア教育関連科目群に加えて、他にも新たに、社会の「現場」体験・課題解決型科目をゼロ群に開設することをめざす。
	年度目標	イオン銀行の寄付講義である「リベラルアーツ特別講座(金融リテラシー)」が0群に置かれ、2020年度から開講されるが、実施状況、履修者の反応、成果、課題を検証する。
	達成指標	「リベラルアーツ特別講座(金融リテラシー)」実施の振り返りに伴い、その実施状況、成果や課題の調査を行う。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
		自己評価 S
		理由 「リベラルアーツ特別講座(金融リテラシー)」の授業最終回にILAC執行部が参加し、イオン銀行側講師・担当者の方と実施状況、履修者の反応、成果、課題について意見交換をし、また、科目責任者であるILAC副センター長が第4回ILAC運営委員会で、実施状況や成果について報告・説明し、情報共有した。さらにその応用・展開としてイオン銀行寄付講座による「リベラルアーツ特別実習(国内外インターンシッププログラム)」を0群に設置した(第6回ILAC運営委員会審議・承認)。
	改善策	—
【重点目標】 ILACは、2020年度に新カリキュラムの完成年度を迎える。新カリキュラムの課題点の抽出を行うためにILACでは2019年度に①「各分科会による課題点と改善策」の提言、②「年次別サンプリング調査」、③学生モニター制度によるモニタリングを行った。リニューアル、リスタートに向けて、ここから浮かび上がる新カリキュラムの課題解決のための議論、検討を行う。 【目標を達成するための施策等】 左記①②③をもとに作成した「新カリキュラム Reborn プロジェクト」に沿って、卒業所要単位のありかたの見直し、カリキュラム構造の再検討、カリキュラムマップ・ツリーのリニューアルに着手する。 【年度目標達成状況総括】 2020年度は、新型コロナウイルス対応が1年間を通じて大きな課題であったことはまず特筆されるべきである。上記の重点目標・その施策を中心課題に据えながら、教育課程・学習成果の「教育課程・教育内容に関すること」においては、市ヶ谷地区における教養教育の幅を広げるという理念のもとに、卒業所要単位の配分の見直しを行った。これによって、0群科目が卒業所要単位に組み込まれ、学生が新カリキュラムを順次的、体系的に履修できる幅が広がった。「教育方法に		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

関すること」については、関連 6 学部の新入生ガイダンス時に ILAC 科目のカリキュラムを説明する動画ファイルを作成し、ILAC カリキュラムの順次性、体系的なつながり、また 300 番台について理解が行き届くようにした。(第 9 回 ILAC 運営委員会承認)。「学習成果に関すること」においては、教育開発支援機構 による 2020 年度学生モニター制度を活用し、2020 年 12 月 11 日に Zoom で実施した。執行部で作成した事前アンケートに参加学生全員にあらかじめ答えてもらい、それをクロス集計したうえで、モニタリングを行った。この成果は「教育開発支援機構 2020 年度学生モニター制度実施報告 (ILAC 検討資料)」にまとめ、第 9 回 ILAC 運営委員会で説明・報告した。また、「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」、いわゆる Reborn プロジェクトにおいて、2020 年度の分科会の課題・問題点の取り組み状況のフィードバックを行い、分科会に報告書を作成・提出していただいた。それをまとめ、第 10 回 ILAC 運営委員会で情報共有を行った。これについては ILAC の内部質保証委員会で評価・具体的な改善方法の提言をいただき、それによって自律的な改善サイクルを構築する。

そのほか、教員・教員組織では ILAC 運営委員教授会主任・ILAC 執行部との連携会議を作り、そこでの意見を「学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合の手順」として提案し、学部・ILAC 間の協働を図った。達成指標を満たす取り組みができたと評価できる。また、「社会貢献・社会連携項目」についても、達成指標を満たすことができ、中期目標の達成に向けて必要な取り組みが進んでいると評価できる。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2020 年度において目標を達成している。1 年間新型コロナ対応があった中で達成できていることは評価できる。大規模人数授業の web 事前登録抽選制を 2020 年度から実施することを「履修の手引き」、web、HP 等を通して周知し、実施したが、新型コロナ感染症禍のため、授業が 1 年を通して基本的にオンラインとなったため、具体的に抽選制の効果を測定する状況とはならなかった。しかし、この試みは継続して実施する必要がある。今後の効果を見守りたい。一方で、大規模授業のオンデマンド形式における適切な授業環境に関して検証することも必要であろう。2021 年度に向けて学部の新入生ガイダンスで用いる ILAC カリキュラムを説明する動画が企画され、制作されたことは評価できる。

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	2017 年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料とした議題を運営委員会において設け、各学部・分科会独自のアイデア・提案も募りながら、市ヶ谷地区における教養教育の幅を広げる（リソースをさらに豊かにする）ことをめざした議論をおこなう。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・学部・ILAC が共同して、市ヶ谷地区の共通の教養教育の幅を広げる可能性について、検討する。 ・学生モニター制度を活用して、学生側からの対面/オンライン授業のあり方の要望や課題を整理して、教養教育の幅を広げるリソースとする。また、同制度を活用して、現行のカリキュラムマップ・ツリーの問題点の改善へとつなげる。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ILAC 長がメンバーとして参加している市ヶ谷コミュニティ連携会議において、市ヶ谷地区の共通した教育課題に ILAC として貢献する。 ・学生に対面授業とオンライン授業における教養教育について、および、現行のカリキュラムマップ・ツリーについてのモニタリングを行い、ILAC で情報共有する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数制授業科目におけるアクティブラーニングの促進や課題解決型授業の新規導入をはかる。 ・学部専門教育カリキュラムと ILAC カリキュラムの有機的なつながりを学生に理解させるため、各学部の新入生ガイダンス等の改善を工夫する。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・2020 年度のオンライン授業での経験の蓄積、またオンライン授業が新たな授業形態として定着していることを受けて、アクティブラーニングを含めた、授業目的を達成するための効果的なオンライン授業のあり方を検討する。 ・アクティブラーニングを実施できる総合科目の「教養ゼミ」の履修に関する制度的な改善について検討する。 ・カリキュラムマップ・ツリーの視覚的体系性・順次性可視化の向上と一覽性の改善に向け

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		て検討を開始する。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ILAC 授業担当者（教員）にアンケートを取って、2020 年度のオンライン授業との比較や変化、またオンライン授業の工夫やアクティブラーニングのグッドプラクティスを整理し、ILAC でその情報共有を図る。 過少人数受講生科目となりがちな「教養ゼミ」を意欲ある学生が複数履修できる制度を導入する。 カリキュラムマップ・ツリーの可視化の向上にむけて、プロジェクトチームを立ち上げて、議論を開始する。また、テーマごとの履修モデルを試験的に構築するための議論も開始する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	2017 年度にスタートした、体系的（順次性）を重視した新カリキュラム（昨年度入学者から適用）の成果は、本格的には完成年度（2020 年度）をもって明らかになるが、それまでに暫定的な成果を調べるため、新たに幾つかの指標を導入する。
	年度目標	・2020 年度をもって新カリキュラムの完成年度を迎えたので、新カリキュラムの成果、課題点、改善・対応策を洗い出し、それを成果と継続的な解決すべき指標とする。その際に、オンライン授業の成果にも十分な注意を払う。
	達成指標	・2021 年度における「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」に関する分科会の課題点・その対応策等取り組み状況のフィードバックをオンライン授業の場合も含めて、行う。
No	評価基準	教員・教員組織
4	中期目標	2017 年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料として、6 学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化をめざす。
	年度目標	ILAC 関連 6 学部と ILAC との科目、人的交流の協働の促進を目指し、相互補完的な教養教育の体制やあり方について検討し、その結果を ILAC 運営委員会で情報共有する。
	達成指標	ILAC 運営委員教授会主任と ILAC 執行部の連携会議を開催し、学部と ILAC の協働の可能性について検討する。
No	評価基準	教育研究等環境
5	中期目標	履修者数が教室定員を超過する大人数授業が少なくない ILAC 科目において、適正な授業環境の確保（履修者数の調整）に努める。
	年度目標	大人数授業、あるいは過大人数授業の授業の質を担保するために、オンライン授業であっても、抽選制を導入し、受講者数を制限しているが、こうした過大、あるいは大人数授業のオンライン授業の環境について、調査、検討する。
	達成指標	オンライン授業形態における大人数授業、あるいは過大人数授業のメリット・デメリット、授業環境の要望について調査する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
6	中期目標	自然科学センター（自然科学分科会教員が参加）ですでに実績がある、一般市民や児童への啓発活動「サイエンスコミュニケーション」や、社会連携の「窓口」的な意義を有しているゼロ群のキャリア教育関連科目群に加えて、他にも新たに、社会の「現場」体験・課題解決型科目をゼロ群に開設することをめざす。
	年度目標	0 群に設置した、社会と連携し、社会の「現場」体験ができる「リベラルアーツ特別講座」「リベラルアーツ特別実習」の履修状況を調査し、どのように機能しているかを検討する。
	達成指標	「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」のゲスト講師の方々や科目責任者が振り返りを行い、課題点や今後の展望を検討する。
【重点目標】 2017 年度にスタートした新カリキュラムについて、2020 年度には「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」として各分科会の観点から改善点および対応策等を挙げてもらった。2021 年度ではそれらの改善点や対応策等を ILAC 全体、各分科会で共有し、活用することを目指す。また、コロナ禍の中でオンライン授業が有効なオルタナティブとして認知する向きが見えるが、創意工夫したオンライン授業の取り組みは履修者数や科目特性によってそれぞれ異なると思われる。そこで、2021 年度は、2020 年度のオンライン授業の工夫やアクティブラーニングのグッドプラクティスを情報共有し、活用に導くことが必要である。一方、現在、ILAC 科目のカリキュラムマップおよびツリーは体系的（順次性）を重視した総花的な形態であるため、学生がそれらを理解して履修計画を立てることは困難であり、幅広いリベラルアーツの涵養にはつながらず状況であることが課題となっている。そこで、学生の学びの体系・方向性が可視化されたカリキュラムマップ		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

およびツリーの見直しならびに公開に取り組むとともに、学際的なテーマに沿った科目群をグループ化し、学びの方向性を明示する履修モデルを提示することを目指したい。

【目標を達成するための施策等】

ILAC 授業担当者（専任・兼任教員）にオンライン授業に関して、その取り組み、工夫、課題点、要望、試験の方法、評価の方法、メリット・デメリット、オンライン授業事態に対する評価等についてアンケートを取り、それを集計し、各分科会と情報共有するとともに、そのなかのグッドプラクティスを紹介する。そして、Reborn プロジェクトに関する分科会の課題点およびその対応等の取り組み状況について相互に意見交換する場を設ける。また、新たにプロジェクトチームを設置した上で、学生が学びの体系・方向性を理解しやすいカリキュラムマップおよびツリーの見直しや、学際的なテーマごとの履修モデルを試験的に構築する。さらに、学生モニター制度を活用してオンライン授業やカリキュラムマップおよびツリーに対する学生の意見を収集し、新たなプロジェクトに反映させる。

【2021 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2017 年度にスタートした新カリキュラムは 2020 年度をもって完成年度を迎えたので、その成果、課題点、改善・対応策を洗い出す段階に進んだ。「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」の名のもと各分科会から示された改善点・対応策等を ILAC 全体、各分科会で共有し、活用する場を設けたことは、適切である。履修者数が教室定員を超過する大人数授業に対して、2020 年度から抽選制を導入したが、2021 年度においても抽選制を適用する方針が示された。オンライン授業であっても、抽選制を適用し、受講者数を制限することは、教育の質保証の観点からも適切である。学生にとって学びの体系・方向性を理解しやすいカリキュラムマップ、およびツリーの見直しと公開が目指されている。その実現を期待したい。

小金井リベラルアーツセンター

I 2020 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020 年度大学評価結果総評】（参考）

小金井リベラルアーツセンターでは、引き続き理系学部に適格的な内部質保証の工夫が求められる。当面、理工学部・生命科学部で連携し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら質保証問題について検討されることを期待したい。また、従来より懸案であった情報科学部の KLAC への参加については、2020 年度より諸語科目の履修が開始されたが、理系教養教育のあり方について引き続き検討されることを期待したい。2019 年度に自己評価が B 評価であった「継続して授業相互参観の充実を図る」という目標については、今年度末の改善報告に期待したい。

なお、新型コロナウイルス感染症を防止しながらの教育活動は全学的な課題であるが、オンライン授業における問題点の洗い出しや学生個々のケア、さらに対面型授業における問題点等を含めて、教育開発支援機構および 3 センターで力を合わせ、解決に取り組まれることを期待したい。

【2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

内部質保証体制については、理工学部教授会主任を委員長とする自己点検委員会を組織し、理系専門教育と分科会（英語、人文・社会科学、スポーツ健康科学、諸語、リテラシー、数学、理科）の守備範囲を考慮し分担して自己点検を行った。

2020 年度は、教育開発支援機構と連携をとりつつ、オンライン授業対策として、授業アシスタントや TA の配置にあたった。また、ZOOM 会議を開催して、オンライン授業における問題点などについて教員間で議論する場を設けた。ひきつづき関係各所と連携し、授業改善にとり組む。

理系教養教育については、学生にインセンティブを与える（仮称）KLAC 版サティフィケートプログラムについて、小金井キャンパス学部間で検討する予定である。

情報科学部については、2020 年度より KLAC 諸語科目の履修を開始し、学生から相当一定の反応があった由、学務部から報告を受けている。今後の展開を想定し、ひきつづき履修登録状況の把握等を行う予定である。

授業相互参観については、COVID-19 問題もあり目立った進展は果たしえなかった。オンライン授業参観も含めて、ひきつづき相互参観の充実を図る。

【2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、2020 年度大学評価結果総評で、引き続き理系学部に適格的な内部質保証の工夫が求められたことに対し、理工学部教授会主任を委員長とする自己点検委員会を組織して自己点検を行っており、適切である。

教育開発支援機構と連携をとりつつ、オンライン授業対策として、授業アシスタントや TA の配置に当たったこと、ま

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

た、Zoom 会議を開催して、オンライン授業における問題点などについて教員間で議論する場を設けたことは、適切である。

理系教養教育に関しては、学生にインセンティブを与える（仮称）KLAC 版サティフィケートプログラムについて小金井キャンパス学部間での検討が予定されており、期待される。

情報科学部を含めた教養科目の共通運用に関し、2020 年度より情報科学部において KLAC 諸語科目の履修を開始した点は評価できる。さらなる融合が期待される。

授業相互参観については、COVID-19 問題もあり目立った進展は果たしえなかった、とある。オンラインでの授業参観も含めて、相互参観の充実を図ることを期待する。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	S A B
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>英語科目群、教養科目群（人文・社会・自然科学系、スポーツ健康科学、選択語学系、リテラシー系）、理系教養科目群（数学系、理科系）からなる幅広い教養科目を提供している。</p>	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>該当せず</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 理工学部生のための履修の手引き（冊子体 • ・Web 版） • 生命科学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版） • KLAC 運営委員会資料・議事録 	
②初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S A B
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <p>・科学実験では COVID-19 問題のため、春学期は対面授業をほとんど実施できなかった。そこで、動画を含むオンライン教材を作成し、授業を実施した。動画には、実験手技をふんだんに取り入れ、教材資料にも丁寧な解説を加え、単位修得可能なレベルのものにした。対面でのレポート指導の代替として、メールを利用した質問対応、TA を利用したレポート添削などによりフィードバックをおこなった。秋学期は感染対策を施しながら、対面実験も実施した。春学期に作成した教材で予習させることにより、従来より、効率的な授業を実施することが可能になった。また、少人数クラスに分けたことも、実習内容の理解に効果的であった。春学期対面実習が行えなかった学生に対しても補習実習をおこなった。</p> <p>・数学科目では、高等学校との接続にも配慮した共通テキストを採用している。</p> <p>・リテラシー科目では、高等学校までの基本的なパソコン操作の習熟度を調査し、それに基づいたテキストの作成および TA によるサポートを実施している。</p>	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・化学基礎において、授業支援アシスタントを活用し、オンライン授業を円滑に進めた。また、オンデマンド教材コンテンツ（教育支援課企画）を作成し、教材資料に実験を動画で入れることにより、教育効果を高める試みをおこなった。</p> <p>・数学系科目においてラーニング・サポーター制度の活用を開始した。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 該当科目のシラバス（Web 版） • 新入生ガイダンスでの資料（冊子体・Web 版） • 理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版） • 生命科学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版） • 書籍『コア講義 微分積分』、『コア講義 線形代数』（裳華房） 	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

③学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「キャリアデザイン」では、自分自身を理解し、自分の生き方・働き方について考える機会を提供している。 	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当せず</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「キャリアデザイン」シラバス 	
1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【履修指導の体制及び方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「履修の手引き」において、科目区分ごとの目標を明示している。 ・2021年度は、COVID-19問題の影響により、Web上での情報公開に留まった。 ・英語および諸外国語科目については、入学時の語学ガイダンスは、COVID-19問題対応により、WEB上で行った。 ・英語科目では冊子「英語上達への道」を作成しオンラインで配布している。 	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当せず</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「英語上達への道」（冊子体・Web版） ・「選択語学ガイダンス」と「英語ガイダンス」実施案内（Web版） 	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リテラシー科目では、レポート執筆の基本ルール、効率的な情報処理手法、効果的なプレゼンテーションスキルを修得できるような課題を設定し、その解決手順を詳しく解説している。 ・理系教養科目ではTA、ラーニング・サポーターも、学習指導全般に活用している。 	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・採用枠が拡充された「授業支援アシスタント」制度を活用して、理科分科会では、2020年度の春学期と秋学期の化学系基礎科目の一部で、授業支援アシスタントを採用して、オンラインでの授業実践に活用した。 ・数学分科会では生命科学部の数学系教養科目を対象とするラーニング・サポーター1名を採用した。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（科学実験）「レポートの書き方」「レポートチェック事項」 ・授業支援アシスタント実績報告 	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）では、毎回レポートを課し、予習・復習を盛り込むことにより、学習時間を確保している。 ・リテラシー科目では、課題の提示と、自己学習（復習用）の教材や資料提供で学習時間増加を促進している。また、パソコンの基本ソフト（Word, Excel, PowerPoint等）の活用スキルの向上を目的として、2020年度からラーニング・サポーター制度の活用を開始した。 ・また、英語科目の一部の授業では多読を推奨し、読書の記録を提出させて総語数による学習動機向上を図っている。 	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リテラシー科目において、2020年度からラーニング・サポーター制度の活用を開始した。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅱの「レポートの書き方」「レポートチェック事項」 ・科学実験（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）ガイダンス資料 	
④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>【具体的な科目名及び授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リテラシー科目では、演習時間の確保、自ら設定した調査課題の発表及び教員・TAとの意見交換など、アクティブラーニングの導入を心掛けている。 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・短期留学制度（SA）は、COVID-19 問題により、中止された。 ・英語教育改善プロジェクトにおいて、英語教育の在り方を継続して話し合っている。 	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験では、COVID-19 問題対応も考慮して、実験動画などのオンデマンド教材の作成を行い、オンラインと対面実験を併用する効率的な授業実施への取り組みを始めた。 ・英語科目ではオンライン授業を行った結果、ブレンディド・ラーニングの有効性を確認した。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験の実験動画 ・英語教育改善プロジェクト資料・議事録 	
⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2021 年度も受講者登録抽選科目については抽選を行い、1 授業あたりの学生数の配慮を維持した。 ・英語科目については必修科目を含めて定員を設けており、内容・レベルに適した受講者数を維持するよう対応している。 	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 該当せず</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理工学部・生命科学部共通 教養科目・教職科目 時間割 （Web 版） ・理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版） ・生命科学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版） 	
<p>⑥通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19 への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。</p>	
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験では、実験動画などのオンデマンド教材を作成・活用して、対面実験における実験項目の効率化およびクラスの少人数化により、COVID-19 流行下でも安全かつ有効な教育体制の構築・運用を行った。 ・化学系基礎科目の一部では、学務部教育支援課企画の「オンデマンド授業コンテンツの作成」を利用してオンデマンド教材の充実をはかり、COVID-19 流行下でのオンライン授業への対応を行った。 ・リテラシー科目のラーニング・サポーターをオンラインでも実施しており、COVID-19 流行下で大学に通学できない状況においても学生からの質問対応など学習サポートができる体制を構築している。 ・数学分科会では、学習支援システムで課題の出題・採点を行うための出題フォーマットを検討し、兼任講師にも共有した。 ・スポーツ健康科学実習では「身体活動・運動実践記録」を実施し、毎日の身体やスポーツ活動の記録と、毎週毎に振り返りを行うことで、自分自身の活動量や運動の機会を確認し、健康の維持・増進を促している。あわせて学期末のレポートでは COVID-19 による運動機会の減少を踏まえた運動トレーニングのあり方について考えさせるテーマを課している。 ・人文・社会科学分科会では、オンライン授業の教育効果向上のため、学習支援システムや情報システム（成績登録システム）の効率的な使い方や授業のアイデアについて、兼任講師との懇談会を実施し、個別にも随時質問に対応している。 ・語学科目については、数回にわたり有効なオンライン授業の仕方の授業打ち合わせ会と、学習支援システム、Zoom など使い方の講習会を開いた。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験の実験動画 ・科学実験（I、II、III）ガイダンス資料 ・2020 年度秋学期小金井キャンパススポーツ健康科学系実技科目履修者 身体活動・運動実践記録 ・英語教員が作成した Zoom 利用法のパワーポイント資料 	
1.3 成績評価、単位認定を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【確認体制及び方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験科目では、成績会議を行い、適切な成績評価、単位認定を行っている。 ・リテラシー科目では、小テスト、演習・レポート課題に基づき、定量的に評価している。 ・数学系科目では、複数教員が担当する科目において成績の比率調整など成績基準を打合せている。 ・英語科目では TOEIC による習熟度別クラス編成を行うが、成績評価において公平を期するため、クラスのレベルを考慮 	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

し習熟度上位クラスで成績を有利に評価している。	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当せず	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・実験科目成績判定会議議事録	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布の状況を把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。 ・「科学実験Ⅱ」において、全クラスの成績分布の年次推移を集計、担当教員間で共有している。 ・英語分科会では2018年度に作成した英語成績分布のガイドラインを作成し、兼任講師に展開している。 ・(参考) 数学分科会では、平常時は統一試験を実施し、成績分布を共有しているが、2020年度は統一試験を実施しなかったため、成績分布の共有も行わなかった。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「科学実験Ⅱ」成績分布の推移	
②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
※取り組みの概要を記入。 ・KLAC 自然科学分科会を数学分科会、理学分科会に分け、数学教育及び理科教育における学習成果の把握等に分野の特性に応じて対応できる体制をとっている。 ・英語教育においてはTOEICの点数を、諸外国語教育においては検定試験の結果を、学習成果を測定する指標の一つとしている。 ・(参考) 数学分科会では例年、統一試験を実施して指標の1つとしているが2020年度は公平性担保などの問題点から非実施とした。	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当なし	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。 ・実験科目では、実験作業や実験ノートの確認、レポートに関する試問等により実験内容の理解度・到達度を把握・評価するようにしている。 ・リテラシー科目では、学生が行ったプレゼンテーションや演習課題に対し、教員が試問することにより、理解度を把握している。 ・英語科目では学生が継続的に受験しているTOEICの成績集計・集積を行い学習成果の把握を行っている。	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当なし	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を組織的・定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 ・理系教養科目では、プレースメントテストと入学後の数学・物理の成績についてその推移を入試経路別に調査している。 ・英語科目では、入学時、1年生12月及び2年生12月にTOEICを行い、さらに、3年生、4年生になってからも希望者に対して受験を促し、学習成果の把握に努めている。さらに、TOEICテストの結果に著しい成績上昇がある場合に、成績のボーナス制度が設定されている。	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当なし	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※利用方法を記入。 ・授業改善アンケートの KLAC 担当科目の自由記述（KLAC からの申請で入手可能）について、必要に応じて理工学部・生命学部の執行部に開示する仕組みになっている。	
【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 該当なし	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて、設備・実験機器の経年劣化がみられつつある。一方、履修指導の成果で、近年、多くの学科で科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの履修率が増加している。これはよい傾向であるが、入学者超過がおこった場合に履修者数が実験室の収容人数を超えると同時に、TA や実験機器等が不足する恐れがある。これに対し、科学実験Ⅲでは 2019 年度に顕微鏡を 7 台購入し、保有台数を 43 台とした。この措置により、人数が多いクラスでもほぼ 1 人 1 台顕微鏡が使用可能になった。また、科学実験Ⅱでも経年劣化の著しい実験機器に頼る一部の実験テーマを見直し、2020 年度から一部テーマについては変更して実施した。収容人数を増やすため、実習スペースを拡大することは現実的には困難であるため、引き続き学部と協力するなどして設備・機器の更新・充実を進める必要がある。 ・スポーツ健康科学講義・実習では、2019 年に大幅なカリキュラム変更を実施したが、身体運動に関わる実験実習の設備・実験機器が全く準備できていない。各学部と協力して、実験スペース、機器、設備、サポートスタッフの手配を進める必要がある。 ・スポーツ健康科学実習では、各学期の 1 時限目で緑町グラウンドを利用できる回数等が制限されている。2020 年度は COVID-19 の影響で緑町グラウンドの利用はなかったが、今後、対面授業を再開する上で、感染リスクの低減や授業運営上の支障を考えると、利用制限がなされないよう関係部局との調整が必要である。 ・数学分科会ではオンライン授業下でも公平に統一試験を実施する方法を検討する。 ・受講者登録抽選科目は、抽選を行い 1 授業あたりの学生数の配慮は維持した。一方で、受講者制限を設けなかったオンラインの講義科目において、受講者が多すぎ、教員に多くの負担がかかるケースが発生した。 	

【この基準の大学評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、英語科目群、教養科目群（人文・社会・自然科学系、スポーツ健康科学、選択語学系、リテラシー系）、理系教養科目群（数学系、理科系）からなる幅広い教養を修得できるカリキュラム編成となっており、評価できる。科学実験では COVID-19 問題のため、春学期は対面授業をほとんど実施できなかった。その事態に対応するため、動画を含むオンライン教材を作成して授業を実施したこと、また、対面でのレポート指導の代替として、メールを利用した質問対応、TA を利用したレポート添削などによりフィードバックをおこなったことは、評価できる。数学

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

科目で、高等学校との接続にも配慮した共通テキストを採用していることは評価できる。リテラシー科目で、高等学校までの基本的なパソコン操作の習熟度を調査し、それに基づいたテキストの作成および TA によるサポートを実施していることは、評価できる。

実験科目では成績会議で成績を評価する。リテラシー科目では、小テスト、演習・レポート課題に基づき、定量的に評価する。数学系科目では、複数教員担当科目で成績の比率調整など成績基準を打合せる。英語科目では TOEIC による習熟度別クラス編成を行うが、成績評価において公平を期するため、クラスのレベルを考慮し習熟度上位クラスで成績を有利に評価する。以上のように、成績評価と単位認定は適切に行われている。

2 教員・教員組織

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①センター内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。</p> <p>【2020年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員による授業公開・相互参観の利用。 ・科学実験における独自アンケート調査 ・科学実験における履修者数推移調査 <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入 該当せず</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験独自アンケート ・科学実験履修者数推移集計 	
②組織編制やFD等に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。	
<p>※取り組みの概要を記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、時間割（クラス分け）を連携して行っており、COVID-19対応においても、柔軟なクラス編成が可能となり、より少人数での対面実験を実施した。 <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）ガイダンス資料 	

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、各科目（物理学、化学、生物学）の専門教員が連携して授業運営にあたり、それぞれの教育の質向上や柔軟な授業実施が図られている。	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・2021年度はCOVID-19への対応として、オンライン授業と対面授業を行っている。KLACは、幅広い分野の科目がある。この多様性を生かし、どのようなオンラインと対面のブレンディッド授業が実施できるか、効果的な教育の可能性を模索し、KLAC運営員会で情報共有を図る。	

【この基準の大学評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、新型コロナウイルス感染症禍への対応として活用されるオンライン授業のなかで、教員に

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

よる授業公開、相互授業参観をどう実施してゆくか、工夫が求められる。「科学実験」においては、FD アンケートに加えて独自アンケートが行われていること、履修者数推移調査が行われており、適切である。幅広い科目の担当教員を擁するKLAC の特性を生かして、オンライン授業自体をどのように充実したものとしてゆくか、問題の共有と引き続いての解決策の検討を期待したい。

Ⅲ 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	内部質保証	
1	中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。	
	年度目標	昨年度同様に、運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検状況を検討する。	
	達成指標	自己点検委員会の開催。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検状況を検討した。	
改善策	特になし。次年度も引き続き、自己点検委員会を開催することが望ましい。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
2	中期目標	学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う。	
	年度目標	2020 年度から小金井地区における留学生の日本語教育が始まる。授業の質保証を目的に小金井キャンパスの関係各所と連携を図る。 ----- 教養教育充実のためにラーニングサポータ制度を活用する。	
	達成指標	小金井地区における日本語教育の実施状況について関係各所と情報共有を行う。 ----- コロナウイルス問題の対応なども考慮し、オンライン指導の実施状況の把握および情報共有する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		初年度の小金井地区における留学生の日本語教育を春秋学期 4 クラスずつ Zoom と GoogleClassroom で実施した。授業の質保証のために、日本語教育科目調整会議が 2 回開催された。オンライン授業のために兼任の先生向けの講習会を実施し、問題解決に当たった。 ----- 科学実験ではコロナ禍において、春学期は対面授業をほとんど実施できなかった。そこで、動画を含むオンライン教材を作成し、授業を実施した。動画には、実験手技をふんだんに取り入れ、教材資料にも丁寧な解説を加え、単位修得可能なレベルのものにした。対面でのレポート指導の代替として、メールを利用した質問対応、TA を利用したレポート添削などによりフィードバックをおこなった。秋学期は感染対策を施しながら、対面実験も実施した。春学期に作成した教材で予習させることにより、従来より効率的な授業を実施することが可能になった。また、少人数クラスに分けたことも、実習内容の理解に効果的であった。春学期対面実習が行えなかった学生に対しても補習実習をおこなった。 ----- 数学系科目においてラーニングサポータ制度の活用を開始した。 ----- 化学基礎において、授業支援アシスタントを活用し、オンライン授業を円滑に進めた。また、オンデマンド教材コンテンツ（教育支援課企画）を作成し、教材資料に実験を動画で入れることにより、教育効果を高める試みをおこなった。 ----- 英語では、オンライン授業を行った結果、ブレンディドラーニングの有効性を経験した。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		改善策	ひきつづき小金井キャンパス関係各所との連携は必要であり、次年度も連携を図る。 ----- 英語では 2020 年度のオンライン授業実施経験から、ブレンディドラーニングの可能性を図る。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
3	中期目標	教員による相互チェック体制の充実を図る。	
	年度目標	継続して授業相互参観の充実を図る。	
	達成指標	コロナウイルス問題対応なども考慮し、オンラインによる授業相互参観の実施が可能か検討し、試行する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価		A	
理由		オンライン授業の相互参観をおこなった。	
	改善策	特になし	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
4	中期目標	教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。	
	年度目標	前年度に引き続き、期末試験を統一試験として行っている 4 科目 (24 クラス) の素点データの度数分布表を作成する。電気電子工学科・応用情報工学科において、秋学期開講科目が必修化されたことの影響を把握するため、2 学科についてはより正確な検討を行う。統一試験が実施できない場合には、代替措置を検討せずデータの収集も行わない。 前年度に引き続き英語力については入学年度 4 月と 12 月、および 2 年次秋に TOEIC テストを行い、継続的に教育効果の測定を行う。	
	達成指標	十分なデータが得られた科目の数を指標とする。 コロナウイルスの状況を考慮し、対面によらない実施法などを検討、実施し、継続した成績データの収集と分析を行う。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価		A	
理由		期末試験を統一試験として行っている数学の 4 科目については、オンラインで公平性を保ちつつ実施することは困難であると判断し、統一試験は行わなかった。 ----- 英語のオンライン TOEIC テストは実施された。	
	改善策	オンラインでの実施を想定し、統一試験再開に向けて調整を図る。	
No	評価基準	教員・教員組織	
5	中期目標	学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。	
	年度目標	今後の教員採用に備え、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にする。	
	達成指標	理工学部・生命科学部執行部との情報交換連絡会の開催。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		A	
理由		必要に応じて、情報科学部執行部も含めオンラインおよび、メールによる情報交換を実施した。	
	改善策	-	
No	評価基準	教育研究等環境	
6	中期目標	情報科学部の KLAC 参加のプロセスを検討する。	
	年度目標	2020 年度から情報科学部の学生が KLAC の諸語科目を履修することが可能となった。オンライン授業化のもとでの諸語教育の効果を測る。	
	達成指標	情報科学部の学生の KLAC 諸語科目の履修状況を把握する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		B	
理由		2020 年度始業時に発生した情報科学部の学生の履修登録問題に個別に対応した。	
	改善策	引き続き履修状況の把握と事前予防に努める。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	中期目標	小金井市・教育委員会・総合型スポーツクラブと連携したスポーツ交流事業について、新たな企画、実施体制及び広報体制について検討する。
	年度目標	新型コロナウイルスの影響を鑑みつつ、関係各所と連携の上、スポーツ交流事業の開催を模索する。あわせて地域スポーツイベントへの支援の継続も検討する。さらに、次年度に向けて新たな事業の企画を検討する。
	達成指標	コロナウイルス問題対応なども考慮しつつ、小金井地域におけるスポーツ交流事業の開催とイベント支援を行う。
7	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	C
	理由	「卓球大会」(11月)、「中学生軟式野球教室」(12月)、「中学生駅伝教室」(R3年1月)の3事業の開催および地域イベントの支援を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で全事業の開催が中止となった。
	改善策	新型コロナウイルスの感染状況にもよるが、スポーツ交流事業などの再開に向け、事務局との協議・検討を進める。また、課題としては、実施場所について緑町グラウンドの利用を可能にすべく改善を要望する。
<p>【重点目標】 コロナウイルス問題を契機とした新たな教授法の検討など教員同士の連絡を密にし、小金井キャンパスにおける教養教育の円滑な運営・充実を図る。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 KLAC は、多様な科目があるため、それぞれの授業特性に応じ、オンデマンド・双方向などいわゆるオンライン授業の実施可能性を検証する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 年度の重点目標であった「新たな教授法の検討、教員同士の連絡の緊密化によって、教養教育の円滑な運営・充実を図ること」については、専任・兼任教員を含めたズーム会議の開催などによって可能な限り達成されたといえる。コロナ禍により地域スポーツイベント事業、数学科目の共通試験は行われなかった。科学実験については、秋学期にオンライン授業の成果も取り入れつつ、一部対面授業を実施した。本年度より始まった日本語授業、情報科学部での諸外国語授業については、フォローアップが必要である。オンライン授業の下で、ラーニングサポーター制度、授業支援アシスタント制度を活用し、授業相互参観も実施した。</p>		

【2020年度目標の達成状況に関する大学評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、具体的な目標を設定した項目については概ね達成しており、評価できる。運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検状況を検討したことは、評価できる。2020年度から新たに小金井地区における留学生の日本語教育を Zoom と GoogleClassroom で実施したことは、評価できる。授業の質保証のために日本語教育科目調整会議を2回開催したこと、オンライン授業のために、兼任の先生向けの講習会を実施し、問題解決に当たったことは、適切である。数学科目においてラーニングサポーター制度の活用を開始したことは、評価できる。期末試験を統一試験として行っている数学の4科目については、オンラインで公平性を保ちつつ実施することは困難であると判断し、統一試験を行わなかった件については、その判断を尊重する。今後、オンライン上での実施が可能となるか、検討されることを期待する。

IV 2021年度中期目標・年度目標

No	評価基準	内部質保証
1	中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。
	年度目標	運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検を行い、内部質保証を維持する。
	達成指標	自己点検委員会の開催
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う。
	年度目標	日本語教育の質保証を目的に小金井キャンパスの関係各所と連携を図る。 ----- 科学実験において、COVID-19 対応のため、少人数クラス化し、感染対策を施して対面実験を

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		<p>行う。</p> <p>-----</p> <p>教養教育充実のためにラーニングサポーター、授業アシスタント制度を活用する。</p>
	達成指標	<p>日本語教育科目調整会議の開催。</p> <p>-----</p> <p>COVID-19 対応のため、感染対策を施し、少人数クラス化した対面実験の実施。 ラーニングサポーター、授業アシスタント制度の活用。</p>
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	教員による相互チェック体制の充実を図る。
	年度目標	継続して授業相互参観の充実を図る
	達成指標	オンライン授業参観も含めた授業相互参観の実施。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。
	年度目標	<p>英語では前年度に引き続き英語力については入学年度 4 月と 12 月、および 2 年次秋に TOEIC テストを行い、継続的に教育効果の測定を行う。また、2020 年度のオンライン授業実施経験から、ブレンディドラーニングの可能性を図る。</p> <p>-----</p> <p>数学では期末試験が対面実施可能な場合、これまでと同様に統一試験を行っている 4 科目 (24 クラス) の素点データの度数分布表を作成する。実施不可能な場合に備え、代替手段を検討する。</p>
	達成指標	<p>入学年度 4 月と 12 月、および 2 年次秋に TOEIC テストを実施。</p> <p>-----</p> <p>対面実施可能な場合、十分なデータが得られた科目の数を指標とする。不可能な場合、代替手段の実施、非実施を指標とする。</p>
No	評価基準	教員・教員組織
6	中期目標	学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。
	年度目標	今後の教員採用に備え、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にする。
	達成指標	理工学部・生命科学部執行部との情報交換連絡会の開催。
No	評価基準	教育研究等環境
7	中期目標	情報科学部の KLAC 参加のプロセスを検討する。
	年度目標	情報科学部学生の KLAC 諸語科目履修登録状況を把握する。オンライン授業下での諸語教育の効果を測る。
	達成指標	情報科学部学生の KLAC 諸語科目履修登録状況の把握
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	小金井市・教育委員会・総合型スポーツクラブと連携したスポーツ交流事業について、新たな企画、実施体制及び広報体制について検討する。
	年度目標	昨年度は COVID-19 感染拡大の影響で、全事業とも中止となったが、感染状況を見極めつつ、関係各所と連携の上、スポーツ交流事業の再開および地域スポーツイベントへの支援継続を模索する。更に次年度に向けて新たな事業の企画を検討する。
	達成指標	<p>スポーツ交流事業「卓球大会」「軟式野球教室」の開催。</p> <p>地域スポーツイベント「野川駅伝大会」への協力・支援。</p> <p>次年度新規事業の企画検討。</p>
<p>【重点目標】</p> <p>COVID-19 後を見据えた新たな教授法の検討など教員同士の連絡を密にし、小金井キャンパスにおける教養教育の充実を図る。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>KLAC 科目は多様であるため、分科会ごとに、科目特性に応じたオンデマンド・双方向授業などのあり方を検討し、ZOOM 会議などを通じて、専任・兼任教員間の連絡を密にし、情報共有を図る。</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

【2021 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、評価基準の各項目について、年度目標は中期目標に即して適切かつ具体的に設定されている。「学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う」という中期目標のもと、2020 年度から留学生の日本語教育が始まったことは、評価できる。COVID - 19 対応のため、科学実験において、少人数クラス化し、感染対策を施した上で対面実験を実施した点は、評価できる。教養教育充実のために、ラーニングサポーター、授業アシスタントの制度を活用した点も、評価できる。2020 年度より情報科学部生が KLAC の諸語科目を履修できるようになったことを受け、その履修状況を把握し、その成果について検討することを期待したい。

新型コロナウイルス感染症を防止しつつ、小金井キャンパスにおける教養教育の充実を図ることが喫緊の問題である。専任・兼任教員間の連絡を密にし、可能な限り多角的な取り組みが行われることを期待したい。

【大学評価総評】

教育開発・学習支援センターでは、2020 年度は、新型コロナ感染症禍により強いられたオンライン学習の環境整備に向け、学習支援システムのシステム増強およびメンテナンス強化を行い、本学で提供する各種ツールの、ファーストガイドを作成、公表し、オンラインを活用した授業実施の支援を行った。教員学生の支援に努めたことは評価できる。引き続き、FD 推進センターおよび学習環境支援センターから引き継いだ事業について点検するとともに、これから新たに取組むべき目標を立て、全学的な教育開発・学習支援活動に取り組まれることを期待する。「学生による授業改善アンケート」に関しては、教員の教育の質や学生の学びの質を向上させる仕組みの検討を引き続き期待したい。

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2017 年度にスタートした新カリキュラムが 2020 年度で完成年度を迎えた。従来「基礎科目」として一括されていた科目が「三階建て」に再編され、より体系的な学びができるようになった。コロナ禍においては、大規模授業を含む専任・兼任の ILAC の全科目授業担当者に ILAC 独自の「春学期オンライン授業アンケート」を実施し、その調査結果は共有され秋学期での学習指導に活かされていることは評価できる。また、学生モニター制度を利用し「ILAC 教養教育とオンライン授業」をテーマとしたモニタリングを行っている。今後は新カリキュラムの課題の抽出や見直しの検討が重要な目標になってくる。「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」を中核に据えた長期的な視野に立つての検討を期待する。

小金井リベラルアーツセンターでは、2020 年度は科学実験では COVID-19 問題のため、春学期は対面授業をほとんど実施できなかった。その事態に対応するため、動画を含むオンライン教材を作成して授業を実施したこと、また、対面でのレポート指導の代替として、メールを利用した質問対応、TA を利用したレポート添削などによりフィードバックをおこなったことは、評価できる。

小金井リベラルアーツセンターは、理系学部に適した内部質保証体制の整備が求められる。従来より懸案であった情報科学部の KLAC への参加については、2020 年度より諸語科目の履修が開始された。今後も小金井キャンパスにおける教養教育の充実に向けて、多角的な取り組みが行われることを期待する。

新型コロナウイルス感染症を防ぎながら教育活動を行ってゆくことは全学的な課題である。オンライン授業の充実、問題点の洗い出し、学生個々のケア、対面型授業における工夫等、3 センターで力を合わせ、問題解決に取り組まれることを期待する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。